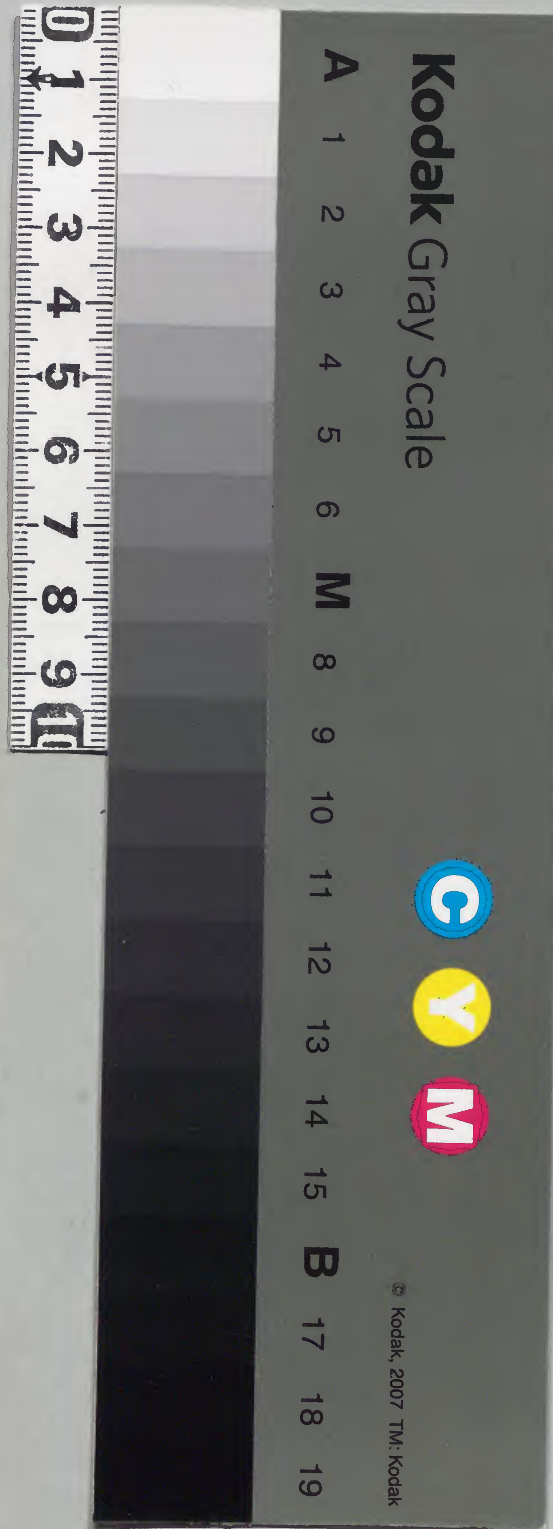


日本書紀傳 卅一卷 六

和 一〇五二二 號

百二十八

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (137)	
函號	特	85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

天稚彦之妻下照姬哭泣哀悲
 聲達于天是時天國玉聞其哭
 聲則知夫天稚彦已死乃遣疾
 風舉尸致天復造喪屋而殯之
 卽以川鴈爲持傾頭者及持帚

者一云以川鴈爲持傾頭者又以雀
 爲春女一云乃以川鴈爲持傾頭
 者亦爲持帚者以鷓鴣爲哭
 尸者以鷓鴣爲造綿者以鳥爲哭
 者以凡以而八日八夜啼哭悲
 衆鳥任事而八日八夜啼哭悲
 歌

天稚彦が喪屋を定めたり所此傳あり乃遣疾風舉
戸致天便造喪屋而殯之と見え第一書あり時天稚
彦之妻子从天降來將柩上去而於天作喪屋殯哭之と
所見たれば混ぶ方無く天上ありて在り狀ありけり然
る小古事記あり故天若日子之妻下照比賣之哭色與
風響到天於是在天天若日子之父天津國玉神及其妻
子聞而降來哭悲乃於其處作喪屋と有のこり右の二
傳あり別ありけり故今事の狀を思ふ小其傳の方や
勝りたり可き如何ありとありて天稚彦ハ不忠誠と由
有て罪を天神小得奉れり神あり其死ありを聞て天

津國玉神以下其妻子共ハ降りも來つ可一天稚彦ハ
限りてハ生ても天上小歸り可く死ても其戸を
舉む事ハ天神の御國ありハ甚可畏き御事あり可一
其上天上ハ一も皇祖天神の御在り坐て産靈の御靈
を以て世中小在ゆる万物を造化ナレシせ御在り坐す本
城域あり在ければ古より今に至り迄草木の榮枯有よ
り外ハ神等の御上小罷ると云事の有べくも非ず故
同ト天神御子と申せとも天忍穗耳尊ハ天降り御在
り坐ざらば故ハ崩御り御事を聞たりを瓊杵尊ハ
至りてハ此國土小御在り坐けるが故ハ久しく高千

總宮小御在り坐て後小崩御し給へり其崩御も
 云ハ形体の數の此小盡て其神靈の天上小還上し給
 給へるあり然して皇祖天神の生を悉く小悦ばせ御
 在り坐て死を強ふる迄悪ませ給へるも天上ありて
 死と云事の無が爲あり然る時ハ此時小其尸を天小
 致すと云ハ下ある喪山の成れ始彼石戸開の時の戸
 隱山の例の如く天より下れ者古人の思誤てよ
 此御紀の狀ハ文を改れたりありけり但四
生章第六一書小伊弉冉尊の當縊殺汝所治國民日將
千頭と申給ひ其對へて伊弉諾尊の愛也吾妹言如
此者吾則當産日將千五百頭と見え此事古事記ハ
是以一日必死一人死一日必千五百人生也と有て

己小生死有と雖も其顯國の事ありて天上ハ其靈
 の歸行く域あり又所以て天皇の崩坐す御事を神上
 と申し凡人の事も葬事を上りすあぢ云是あり又
 寶鏡開始章第一一書小稚日女尊の神退矣と有ハ其
 所を外小避給ふ事あるを古事記ハ天衣織女云
 而死と有り此も他小物爲事を麻加流と云小死を
 も然云故小終めたる事を混へたり者あり事
 傳廿卷二十下委く辨たり如紀詔共ハ其正
 天上の事を同狀ハ書さたり然して天國玉神と申
 すハ傳十九五百十廿二百九十ハ明め書らが如く
 天子カ雄神めて渡り給へるあり其天降坐けむと
 所思ゆハ尊昇分脈ハ被収たり紹運録ハ月讀命の
 子手カ雄命其子生馬武見命と系を立て其手カ雄命
 の弟島根見命有り又異本神系圖ハ月讀尊其子手

カ雄命其弟島根見命と有て其子生馬武見命と見え
又一本神系圖與本朝武家大ハ八月尊其子島根見
命と有リ又神代系圖傳ハ八月讀尊子島根見命其弟
牛カ雄命と有て其牛カ雄命の子生馬武見命弟片倉
邊命有リ今此を惣云ハ月讀尊より系を係たるハ
古書ハ合さレバ取ベクハ其牛カ雄命島根見命を
ハ先兄弟と見レ可ク然ルハ生馬武見命の父を其二
神ハ係たるハ本ハ其亦名あるを兄弟二神の如く傳
はる故ハ然ル混レハ出來ルハ其牛カ雄神と申
すハ御本名ありて島根見命と申すハ天上より御

在レ坐レ著タル地ハ出雲國島根郡あり可クハむ
と所思えたり其生馬武見命と其島根見命と聞え
する間ハ此國ハ生坐ル御子と所見たり其風土記
ハ島根見命郡生馬郷郡家西北一十六里二百九步神
魂命御子ハ尋鋒長依日子命詔吾御子平明不憤詔故
云生馬と有ハ生馬武見命ハ在ベクハ其父島根
見命の御事ハ御在レ坐ベク其吾御子平明不憤
有ハ天推彦ハ天神ハ忠誠ありきハ故ハ死ハ
事勉めて憤ありと其悲哀の御心を押へて公
正の道を述べ給ひて其天稚子が妻子を宥め給ハ

へる御言の如くも聞取らるるあり又キカ雄命を多
久豆玉命とも申せらる同郡未官知れ多久社見え又
多久川とも云も見え又楯縫郡神名樋山の下に古老傳
云阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命來坐多久村
産給多伎都比古命と有る其女神ハ此神の御女也坐
ちども思合するやも一度ハ天稚彦の故ハ天降坐け
むと思ゆるあり是其喪屋ハ天上の事ありさる証ふ
る者あり 此キカ雄神を月讀尊の御子と云ハ同記ハ
島根郡千酌郷云々伊佐奈枳命御子都久豆
美命此處坐と有る即其神の亦名あり事傳ハ卷十
下ハ注らる如く其事より混れたるあり又キカ雄
神を忠美神の子と云説も有れども其等の辨ハ己ハ
傳サニ卷百九十一下ハ注して此ハ用無れハ云ず

如此して天稚彦の喪屋を以て此國土と見て其所在
の求るハ其味耜高彥根神の斫休し給へり即美濃
國の喪山是あり時ハ其近境あり可く思ゆるハ就て
己ハ上百五十ハ注らる如く飛彈國あり可くあり見
えたりけり神名式ハ荒城郡荒城神社見え和名枳郡
名荒城 阿良木 郷名荒城と出たり飛彈志と云物ハ里氏
の説ハ古昔荒城郷の主たり人城荒ると云字を忌て
吉城と改たりと書して今ハ吉城郡と云めり其郷主
たり人の然る事忌たりとて郡名の改む事ハ思
も寄ざり事あり然るハ万葉三五十ハ左大臣長屋主

〇其例ハ和名抄郡
 名周防國佐波吉
 敷ハ與之の二郡有
 推古天皇十一年
 一守御紀小来目
 皇太子の薨生對を
 仍續于固其方安
 波安と云事の有
 且荒城を爲
 地名を改めて吉
 敷と換て別郡
 と立られたるの
 考ハ有依て云
 尙持麻呂風主記
 神前郡の下所
 有荒野者昔此處
 有荒神半殺往來
 之人由此号荒野以後
 品天皇勅云此處
 惡名改爲生野と
 有て死野と生野と
 云換てせ給へる例也
 猶諸國ハ有る事也

賜死之後倉橋部女王作歌一首天皇之命恐大荒城乃
 時尔波不有跡雲隱坐と有る荒城ハ謂ゆる殯斂の屋
 を云祢めて忌ハ一守事あり故めて何時と無く云換
 つろめて神宮の忌詞小死を奈保留と云ひ病を夜須
ハ更あり用蝕を解之味訓ニ草ハハ與志と云ハ
 美あど云如く誰しも惡む言ありり何時と無く改
 りて其神社のい儘ハ古名の残存れりありけり又
菅郡
 和名抄小名張郷遊部郷有る其名張ハ伊賀國あり在
 を天武天皇元年御紀小隱驛家隱郡ノ書され万葉一
二十 小吾勢拈波何所行良武已津物隱乃山辛今日香
五下 越等六又暮相而朝面無美隱尔加氣長妹之廬利

爲里計武と有て隱字を那婆理と訓るハ其字の如く
 意かて此時の喪事とバ衆鳥を以て仕事と有が如く
 天神の御咎を得奉りて天稚彦の殯斂の事ありけり
 ハ其遠慮無しとハ云べりざりあり又其遊部ハ此
 時の事を古事記ハ如此行定而日八日夜八夜以遊也
 と有ハ更あり喪葬令ハ遊部と云有を義解ハ遊部隔
 幽顯境鎮凶癘魂之氏也と有ハ合れバ何れハ殯斂
 の事ハ大由有が上ハ古事記ハ按所御佩之十掬劍
 切仗其喪屋以足蹶離遣此者在美濃國監見河之河上
 喪山云者也其持所切大刀名謂大量亦名謂神度劍と

有る喪山其南ハ隣ル美濃國あり其神度劔ハ神名式ハ謂ゆる
越中國新川郡神度神社あり可くして其古城郡ハ
相接けり地あり小世ハ名高き立山と云有けるハ万
葉十七三十九立山賦ハ須賣加未能字之波伎伊麻須尔
比可波能曾能多知夜麻尔又四十安麻曾、理多可吉
多知夜麻と有て大刀山と云事あり今も其頂を劔峯ケノミネ
と云て夫木集行遍哥ハ山を斫る劔を峯ハ残し置いて
神進ハけり氣比の古宮と詠る氣比宮を詠ハ就立山の事也云此の十早事ハ依て詠
りや立山の麓坊舎の有り邊ハ氣比宮と云ハ祠有
と云ハ但此ハ氣比宮を土人説ハ立山神本ハ滑川の

△尚又和名抄御名
小新川郡布留
佐味比あり有る
未志由有る事
下四百十神度劔
の所ハ注し可
者あり

西の某村と云ハ賀茂社有り本其ハ御在り坐きと云
ハ味相高彦根神して御在り坐をも思合す可く但
其麓ハ氣比宮有る由ハ神名式ハ越前國敦賀郡氣比
神社七座並名見えり天利劔神社坐る其を續後紀ハ氣比大
神之御子と有ハ其枝社の謂ありハ依て立山ハてハ
其氣比神社を枝社と爲る者と見えたり然れハ其神
度劔ハ就てハ立山あり大ハ由有る思合す今
の古城郡ハ古の殯斂の古跡あり事決けりハ此ハ古
事記ハ傳ハれり如く此國ハ在り事ハ見らあり正
しり可くしけり此定説ハ甚容易き事ハてハ非ず
上ハ己ハ注りガ如く大野郡水無

神社ハ下照姬命此ハ御歳神の從祀と成り給へ
由有リ又荒城郡大津神社も下照姬命あり又式
外益田郡下呂郷森村ハ幡宮ハ古く志也久之乃宮と
云々其ハ天探女あり可く思えて上二百三下あり
く注らガ如し又其東ハ隣れハ信濃國水内郡あり
戸隱神社ハ式外あり古より名高くして天稚彦
ガ父神天國玉神の亦名手カ雄命ハ坐あどを明らめ
て此説の如此約まる所以を曉り明らむ可し實ハ
縁の事ハ又此ハ遣疾風舉戸致天と有リ其ハ對へて
ハ非ず故味耜高彥根神昇天予喪と有れども二あぐり心得
ぬ事ころ有けれ其遣疾風と云事ハ天神本紀ハ天
孫本紀ハも饒速日命の此國あり神殞去給ひし所ハ
高皇產靈尊詔速飄神我神御子所使於葦原中國而有
疑恠思耶故汝能降可復白于時速飄命奉勅降來當見

神殞去坐即及上復命と見えたる斯ら事ハ有べし舉
戸致天と云事ハ其二紀ハ高皇產靈尊以為哀泣即
使速飄命以命將上於天上處其神屍骸日七夜七以為
遊樂哀泣哭於天上歛竟矣と有れども甚心得ぬ事ハ
カ傳十五此の古傳と取て私ハ作爲れらる者ハ非しハ注らガ如く人の生り始己ハ皇產
靈の御魂を得て有リ人の死終ハも天上ハ復命
して其靈ハ天上ハ留り雖も屍ハ此ハ朽ら事古よ
カ今ハ至り迄異ある事無し又此天稚彦の如キハ罪
を天神ハ得奉れら者あり如何ぞ其天上ハ屍を致し
て殞歛の事ハ為す事を得若寔ハ然らば其妻下照姬

も上れり味相高彦根神も上給ひ一と爲むら
ぬども右の二柱ハ大己貴命神の珍子神たり然る時ハ
天稚彦以前ハ其神の大己貴神を媚附し給ふと爲て
ハ亦其子神等珍カも交を厚く爲給ふ可きあり天上ハ
て殞斂を致す時其天稚彦カ不忠ハ衆神共惡ふも
爲給ふ可し然れども大己貴神を媚和りて國を避
め奉りむと爲らるハ其二神の天上ハ昇りれしを天
穗日命の寄付て御在し坐すと云事ヤハ有べき然
ら然る事のありも據所無きハ是亦天上ハつての事カ
ぬ證あり此第二一書ハ是時歸順之首渠者大物立
神及事代主神乃合ハ十カ神於天高市以

昇天陳其誠數之至と有て國神の天上ハ昇給へるハ
其飯順奉り後の事あり然飯順奉りぞかり以前ハ
其天神の御國ハ私カ到給ふ時ハ天神を輕蔑し奉り
カ當りて甚く可畏き御事ありハ如何ハ憚りせ奉り
む若て此カ凡以衆鳥任事と有て此葬事カ預る衆
鳥の任ハ雄略天皇九年御紀カ謂ゆる視喪者ハフリツカサ是あり
然れども此事ハ人を以てり任す可かりけれ鳥を以
て其視喪者カ充たりし事ハ甚心行ぬを纂疏カ稚彦
有雉禍故以衆鳥任葬官類之也と注させ給へるありて
明しけし其ハ迂却崇神祭詞カ又遣志天若彦も返言
不申志高津鳥殃ル依志立處ル身死志亡志と有て其無
名雉の爲カ殃を受け天神の御罰カ依て死ねるあり

其形を雉に易たりけむる衆鳥に任事して葬事
を令掌るありけり其ハ天稚彦也善いし由縁を以
味相高彦根神の序喪給ふ時ハ其容貌の相類たりし
ハ云ふなり故天稚彦親属妻子皆謂吾君猶在則攀牽
衣帶且喜且慟と有ハ正しく天稚彦が本身ありて在
むゆハ其屍の側ハ居あがり然取違ふ事ハ有まじ
き者ありをや然れども此ハ衆鳥を以て任事と云ハ然
爲れハ本身ハ復る事もやとして切ての心を慰めむ
其物爲つて其ハ事ハ甚く別ある事ある景
行天皇四十年御紀日本武尊の崩給ふ所ハ仍葬於伊

勢國能褒野陵時日本武尊化白鳥從陵出之指倭國而
飛之下と有る御事の故ハ依て仲哀天皇元年御紀ハ
詔群臣曰朕未逮于弱冠而父王既崩之乃神靈化白鳥
上天仰望之情一日無息是以冀獲白鳥養之於陵域之
池因以觀其鳥欲慰願情則令諸國俾貢白鳥と有る大
小其意用ひの狀相類たる者ありけり此意を得て見
ざれば人を以充て便利有る事あるを捨て鳥を以て
事を委ぬ事と云ふ由終ハ知れずあり有べき世
多く有る事ありて病犬ハ喰れたる者あじの死る時ハ
ハ其形を換りて雖も犬の擬ひを爲つても終るあり
此類あり可ハ天稚彦も其雛たり雉ハ類ありて死
れり後ハ其形を換て雉の狀ハ化れりむも知べり

△私記不利哭悲哀
作て止久岐加
那之布訓たれ
然多木の有りて
其天稚彦が死や
不直ふ色と立て
泣出たら由あり然
れども此木の仕小
那伎加那志年々
訓其意を存小
可あり

○天稚彦之妻下照姬（聖法）悲哀聲古事記も故天
若日子之妻下照比賣之哭聲と有（聖法）其別れを歎き悲
哀（聖法）たれりて己の傳（六十）十（七十）小注（六十）が如く四神出
生章第六一書小至於火神軻遇突智也其母伊弉册尊
見焦而化去于時伊弉諾尊恨曰唯以一兒替我愛之妹
者乎則匍匐頭邊匍匐脚邊而哭泣流涕焉と見えたり
化去ハ鎮火祭詞ハ謂ゆる石隱坐りて頭御身（云ふ）る
根國の方小御在（云ふ）坐けりて常（云ふ）死と別ありて
も其御在（云ふ）坐す成り至てハ生別も死別も然りて異
ふ事無ハ故小歎りせ給へるりて古事記ハ其を

急我那迹妹命乎云と有て乎ハ歎息の御辞ありて其
罷り御在（云ふ）坐けりて呼返り聞ゆる意ありて御名を
呼奉りせ給へるり其匍匐頭邊匍匐脚邊而哭泣流
涕焉と有ハ其御妻屋（云ふ）の御在（云ふ）坐す成り空（云ふ）りて御
床の後と頭との邊を匍匐（云ふ）ひ歎りせ給へるりて此
ハ天稚彦が屍を置て其側ありて泣悲りて給ふ（云ふ）其
將其名を呼て歎りり故小其聲の天小達りハ反
びり者ありけり然るハ仁徳天皇前御紀ハ菟道稚
郎子の薨坐り所小時大鷦鷯尊（中略）太子薨之經三日時
大鷦鷯尊擗擗叫哭不知所乃解髮踏屍以三呼曰吾

第皇子_下略_二有_一其御名を呼活奉_レせ給_ハカ_一御事

の御在_一坐あ_レども思ふ可_クあり_二此事次あり是時

と有_ル所_ニ就_テ委_レく云定_ルを待_テ見_ベく_一人の死

むと爲_ル事_ハ神代_ト○達_于天_ハ其聲の響_キて至_レれ

るあり古事記_ハ與風響_キ到天_ト見えたる_ハ殊_カ其

意を得_テ妙あり其與風_ハ記傳十三_四十_ハ如是能牟

多_ク訓_ベく_一万葉_二十八_ハ小浪之共彼縁此依玉藻成依

宿之妹子又_二浪之共彼依此依玉藻成靡吾宿之又

三_十野每著而有火之_一風之共靡如久_四三

四_一小浪之共靡_田珠藻乃云云意者不持_十七_ハ小峰上尔

零置雪師風之共此間散良思心_{十二}三_十小國遠見念勿

和備曾風之共雲之行如言者將通_{十五}十九_ハ可_レ是能

牟多與世久流奈美尔あ_レ此余も多_ク神_ト云_レた_リ

大抵ハ抱_カの言小近_クして其物_ノ物_ト一_カ成_ル義_カ

るあり響_而ハ記傳_ハ声_ノ餘_ノ長引_をも又声_ノ遠所

へ引行_をも云_ふと云_わた_るが如_ク神武天皇戊午年_ハ

御紀大御歌_ハ字惠志破餌加美_一添_ハ句致弭比俱_ト有_ル

口響_{あり}云_ひ佛足石哥_ハ美阿止都久留伊志乃比

鼻伎波_トも有_テ比毘久_ハ音_有り_口を開_キて音_を出

せば阿_ノ聲_ノ成_リ口_を合_セて音_を出_タり_字の聲_ト

△聲與風相_レ有
ハ此ハ意味似_レ有
可_レ又

△延喜六年_レ竟
歌ハ唐衣下照姫
事_レ終_レ天_レ開_レゆ
田_レ鏡_レあり_レも_レも
も有_レ此_レ私_レ記_レ訓
甚_レ多_レあり_レヤ

成_レ其_レを引_レく時ハ阿阿字字あど、成_レ此_レを韻と云
る是あり決_レめて音_レを高く出_レす時ハ其響_レの遠_レく應
ある者あ_レい_レ其_レを導_レき到_レる者ハ風ある故ハ與風響
到天_レハ續_レけたりあり風の音を生_レす所以ハ傳_レ十五
丁ハ己ハ注_レせり_レ文選ハ肝響_レを比_レ毘_レ伎_レ和_レ多_レ流_レと訓
小_レ色_レ之外_レ曰_レ響_レと注_レせり右_レの神武天皇の大御歌_レの如
きハ薑_レを食_レたり名_レ殘_レハ口_レ内_レハ其_レ余_レ韻_レの殘_レり疾_レらぐ
を云_レひ又源氏物語_レあどハ物_レの_レ達_レ于_レ天_レを私_レ記_レハ阿
榮_レく_レも_レ比_レ毘_レ伎_レと云_レり
女_レ尔_レ支_レ己_レ由_レと有_レり雄略天皇二十三年御紀歌ハ阿每
你_レ舉_レ曾_レ根_レ舉_レ叟_レ儒_レ阿_レ羅_レ每_レ矩_レ你_レ播_レ根_レ舉_レ叟_レ底_レ那_レ見_レゆ
又古事記_レハ到天_レと有_レハ此_レと意_レハ同_レト_レけ_レれども伊多

留_レと訓_レべ_レ記_レ傳_レハ引_レねたり佛足石哥ハ美阿止都久
留伊志乃比鼻伎波阿未尔伊多利都知佐閑由須礼万
葉_レ十_レ一_レハ呼_レ音_レ之_レ不_レ至_レ者疑_レあど有_レり偕_レ此_レハ天_レ稚_レ彦
の其_レ名_レを呼_レて泣_レ悲_レし_レれ_レハ其_レ色_レを天_レ上_レハ到_レく_レ
めて其_レ親_レ族_レの神_レあどハ知_レせ_レあ_レと爲_レる心_レハ在_レざ_レ
めども決_レめて甚_レし_レも_レ及_レびて_レハ其_レ響_レ如此_レく天_レ上_レハ
及_レべ_レら_レあり偕_レ又_レ此_レ色_レハ天_レ稚_レ彦_レが射_レつる矢_レと一_レか_レ
天神の彼_レ反_レ矢_レを投_レ下_レして其_レ應_レ驗_レを待_レせ給_レハ所_レあり
ハ故_レハ風_レと共_レハ響_レきて天_レ上_レハ到_レれり_レして下_レ照_レ姫
の色_レハ奴_レ有_レハ非_レず天神の所_レ知_レ御上_レハ奇_レ異_レあり所

大雄略天皇御
 紀小抱屍駭院不
 解所由反側呼號
 往還頭脚清寧
 天皇元年御紀小
 葬大泊瀬天皇
 于丹比高野原
 陵于時車人晝
 夜哀號陵側
 與食不喫七日
 死

以の有て此ハ及べらむハ有あり通證ハ達于
 風門也注されたるハ甚々味氣無一但博物志室
 之精達于天と有ハ此の字の出所あり可一然れども
 意ハ同ト
 ○是時天國玉聞其哭聲の哭聲を於良夫と
 訓レ力レ皇仁天皇九十九年御紀小田道間守至自常世國
 略乃向天皇之陵叫哭而自死之群臣聞皆流淚也仁德
 天皇御紀小時大鷦鷯尊標擗叫哭不知所如孝德天
 皇大化五年御紀ハ仍拔大刀刺舉其突叱啼啼叫而始
 斬之と有り古事記玉垣宮段ハ其多遲摩毛理の事
 を獻置天 皇之御陵戸而擊其木實叫哭以白中遂叫
 哭死也と見えたるを記傳廿五五十九ハ叫哭ハ佐氣備

淤良備互と訓ベ一三十一万葉九六丁小菟原壯士伊仰天叫
 於良妣蹠地牙喫建怒而と有ハ依りり淤良夫ハ大聲
 を擧て哭叫ガあり哀の甚一時持の態ありと注され
 たり今思ふハ佐祁夫ハ裂裂呼サケヨブして人耳の裂く計りハ
 厲オホアラフ一呼を云ひ於良夫ハ大荒呼サケヨブして大あゝ聲の限
 りを盡して呼ガ事ハ在けねハ必哀一サケヨブも限
 ずと雖も其哀一サケヨブ事ハ當りてハ大聲を立ら事常ハ
 りガ故ハ終ハ其言ハ成ねるあり今も薩摩國人
 呼ハ事と於良夫と云を予も度々聞たり畿内邊ハ
 どもハ其を於賀流も云ハ却りて訛りあり又號
 字を於米伎サケと訓ハ活法ハ大色也と注一軍物語
 ハ於米伊サケ又ハ於米伎佐祁比サケと云を字ハ嘔嘔

又ハ設シ也ト叶呼ハ也ト ○知夫夫樵樵彦彦已死ト有ハ天國玉
訓ト共ハ相近ト 神ハハ也ト彼皇祖天神の御命ハ依テ天高市又ハ天安
河之河原ハ召集ヘル奉リテ共ハ神議スセル中ノ
一神ハ坐ガ故ハ天稚彦ガ射ル矢ノ天神の御前ハ至
ると云ヒ高木大神の咒テ投下サセ給ヘると云ヒ其
等の事ハ心ヲ著テ御在シ坐ツむを果シて下照姫
の哭色の風ハ共ヒテ天上ハ響キ達スたると就テ天
稚彦ガ己ハ身死シたるを知給ヘる由ハめり記傳十
三四五ハハ人ノ死リあるを哀シて哭ハ其人
の此世ハ存リ程ノ事ハども言續ケ又ハ万葉二三十七ハ

△私記ハ疾風波也知ル有リ

柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌ハ爲便字無
見妹之名喚而袖曾振鶴ト詠ル如ク其名ヲも呼ガ故
ハ今彼哭色を聞テ天若日子ガ死リ事ヲ知ル也ト
注レたカ如ク口訣ハ天稚彦通達以知天稚彦之死
ヲ纂疏ハ天國玉聞其哭色謂天耳通又ハ父子同氣暗
知其死也ト注シ給ヘるハ何事ガ天稚彦ノハ不忠
誠ナ降リ給ハ初ハ皇祖天神ハ是壯士也ト言舉ス
世給ヘる程ノ御事ハ渡ル ○遣疾風ハ釋ハ天孫本
紀饒速日命ノ薨給ヘる所ハ高皇產靈尊ニ速飄命曰我
神御子饒速日命所使於葦原中間國而有疑怪思耶故汝
能降可復白矣ハ于時速飄命奉勅降來當見神殞去坐矣

即反上復命云略下有引て兼方案疾風者速飄神也
と有ハ然事あり通證引波夜知猶東風訓古知
也倭名欽暴風史記云暴風雷雨漢語欽云八夜知又乃
和木乃加世
今俗謂之波夜互と有如海宮遊行章第三一書小
又汝兄波海時吾必起迅風ハナオホナリ今其波溺辛苦其枕草
紙八四ハ名恐ろしき物波夜知竹取物語小迅き風吹
き世界暗がりて云く波夜色も龍の吹するあり夫木
十九か波白む沖の波夜色も強りし生田が磯小寄
する友舟あど見えたり儲此小舉戸致天ハ有れど
も速飄神を使ハ立て天稚彦が實小死れりや否其實

を令察たりあり風を使ハ爲る事古ハ諺ハ見えて万
葉四十三額田王思近江天皇歌ハ君待登吾戀居者我
屋戸之簾動之秋風吹と有て其便クワリを得奉り義あり
又鏡王女作歌ハ風乎大ハ戀流波之之風小谷將來登
時待者何香將嘆と有右同ハ可ハ八三歌ハ小
風雲者二岸尔可欲倍掃母吾遠婦之一云波
之婦乃事曾不通
十二三十ハ國遠見念勿和備曾風之共雲之行如言者
將通十九二十ハ足日木山河沮風雲尔言者雖通二十
二十ハ小伊倍加是波比尔ハ布氣等和伎母古賀伊倍
其三登母知遲互久流比等母奈之あど見え中古の歌物

語小風の使又風の便又風の傳あど云は是あり但万葉以
下ありハ神代の古傳ハ依て其事を取て云ハあり
有けれ實ハ然事有ハ非才虚詞を設て云ハあり
ハ神代ハ其事の有ハ故ハありハバ體ハ証ハ
して違ハざりあり西蕃ハ宋玉ハ風賦ハ夫風者天
地之氣傳ハ暢而至と見え河圖帝通記ハ風者天地之
使也と云れども其ハ古傳の有ハ非ハ同ハく虚詞
あり者故其速飄神の名義ハ右ハ謂ゆる疾風の事ハ
て神功皇后元年御紀ハ時飄風忽起御笠隨風仁徳天
皇十一年御紀ハ於是飄風忽起引鮑波水亦ハあり和
名抄ハ飄文選詩云回颯卷高樹兼名苑云颯暴風從下
而上也音焮和名豆無之加世と有ハ是あり又廻毛ハ雅注云
廻毛一云旋毛和名都無之と見ゆ此ハ依て通證ハ十四毛詩ハ

廻風爲飄と有を引て蓋都無之回旋之義也旋毛云都
無之街衢云豆之其義同と云わたりハ然ハ言あり其
引れたる仲正集ハ散めると他所ハ勿遣る色ハの木
葉回らす谷の豆之風と有ハ其言を釋せるハ如ハ神
名式ハ出雲國意宇郡筑陽神社同社坐波夜都武自和
氣神社坐リ其筑陽神社ハ三代實録ハ貞觀元年七月
十一日甲子出雲國無位陽坐志去日女命授從五位下
と有を考證ハ按神名帳中無此神疑陽上脱筑字筑陽
地名志去日女命神名平按志去日女者泉津醜女也共
以黄泉之神筑陽神社列揖屋神社之列と有ハ然ハ言

あり又其同社坐神ハ文徳天皇實録ハ仁壽元年九月
庚午朔乙酉出雲國速飄別命授從五位下之有を強て
此ハ合せ云時ハ筑陽神社ハ謂ゆる黄泉神ありハ天
稚彦ガ死ねりハ就て由有少や頭國少て不忠誠あり
由を以て其魂の天上ハハ升らず彼國ハ罷ら徴と爲
べ速飄別神ハ此度の使ハ降坐て其黄泉國より復
さむりの神議あどの有ハガ爲ハ同所ハ並坐り見
むハ僻事ありハ風土記ハ調屋社同社ト有て
神名を載さず又神名式ハ同國島根郡久良弥神社同
社坐波夜都武自神社風土記ハ久良弥社同社波夜

都武自別社ト有て其未官知ハ掠見社ト申すト有少
右二百八ハ注ガ如ク天稚彦ガ父天國玉神此時の
事ハ就て降給ハ地其島根郡と思ハ合せて速
飄別神の社有少事文ハ合ら者あり久良弥ハ國引文
ハ闔見國トモ有て名高き地名ハ在れども若クハ
天稚彦其靈の黄泉國ハ罷向ひたり由あどハ依れりあり
今余戸里新莊村久良美谷久良美大明神ト申すト云
リ其掠見社ハ其闔見谷の山頂ハ在ト云リ然れども
其殯斂を爲つ所ハ必此ハ在べりハ其事ハ
右二百九十五下ハ注ガを以知べハ久良弥ハ闔見の
義少て天稚彦ガ死ねりハ就て其親族の神等の心惑
あど爲れハ起れりあり可ハ其意宇郡あり筑陽
起神社ハ今ハ筑陽郷伊東村ト云ハ立せ給あり云リ

△次引ら播磨風
土記にも舉其尸
と云事有別處
小移事と舉
らハ云あり

△仲哀天皇九年
御紀小菟收天皇
之屍甘武内宿禰

○舉尸ハ口訣小屍舉天也と有か如く第一一書小將
柩上去於天と有る柩をも加婆祢と訓らハ口訣小有
尸之棺也と有か如く尸ハ棺小收者ありハ其を以
名と爲り景行天皇五十年御紀小明夜空留而屍骨無之推古天皇廿一年御紀小乃開以見屍骨既空
皇極天皇四年御紀小是日蘓我臣蝦夷及鞍作屍許葬
於墓續紀第十三詔小海行波美豆 久屍山行波草牟
須屍玉王乃幣爾去死未能持尔不死止其同ト言少て万
葉十八二十一丁小海行者美都久屍山行者草牟須屍大皇
乃敬尔許曾死采可幣里見波勢自等許等大互拾遣哀
傷小忠蓮南山の房の繪小死人を法師の見侍りて啼

△和名抄葬送貝
棺の下引り四色
字死小屍立日與
ア同割或通死
人形体白屍也見
巾

乃圖を書たりを見て源相方朝臣契有れハ屍あり
とも逢ぬるを我をハ誰り問むと爲らむあど死体を
云祢あり通證小尸皮骨也と云れたらハ然々言あり
うて残れら者ハ皮と可し其中ハ藏めたり精神の脱去て殼と成
骨との二成れハあり△○致天ハ天尔致佐志牟と訓り
此致の言ハ到と並びて彼ハ自然ハして至らあり此
ハ人として至ら令らあり其證ハ第一一書猿田彦神の
條小天鈿女復問曰汝何處到耶皇孫何處到耶對曰天
神之子則當到筑紫日向高十穗樓檣觸之峯吾則當到
應到伊勢之狹長田五十鈴川上因曰發頭我者汝也故
汝可以送我而致之矣中略即天鈿女命隨猿田彦神所云

遂以侍送焉と見えたる此少て其差別有る事を知べ
とあり又海宮遊行章第八二書ハ是時鰐魚策之曰吾
者八日以後方致天孫於海宮唯我王駿馬一尋鰐魚是
當一日之内必奉致焉と見えたる事也伊多須と云ハ
古言ふる事云も更あり伊勢物語一段四十昔女兄第二
人有けり一人ハ賤しき男の貧しき一人ハ貴アテあり男
持りけり賤しき男持たる十二月の晦日ハ袍ウキヌを洗ひ
て手自張けり志ハ致しけれど然る賤しき業も習ハ
ざりけれバ云ふ事ども見えたり其も志をし到る
致すと云事も有て右ハ同し心を盡すし猶心を
近し俗言ハ云ふ致ハ為と云所ハ置あり 偕右 二百
九十

ハおも注る如く鏡速日命の御事と天孫本紀ハ高皇產靈尊以爲哀泣
使速飄命以命將上於天上處其神屍骸日七夜七以爲
遊樂哀泣哭於天上歛竟矣と有ハ此天稚彦の故事を
竊したる杜撰ありして其先ハ速飄神を天降して令
候給へる事ども然も有る事をも天上して殯歛の事を
成すと云てハ世人の死ねる靈ハし何方を指てり
行と爲む若鏡速日命の薨給へる屍骸を高皇產靈尊
の殯歛し給ふと爲る時ハ靈ハ消亡る物の如く見ゆ
めり者をや思ふハ其命下文ハの薨坐亦葬歛於登美白庭邑
と有ハ其神の神物を靈夢ハ依て葬歛たる由ハ記せ

るハ偽ありて實ハ其登美白庭山ハ其屍骸を藏め
 たるを此天稚彦の事ハ似せて書々物ハ在りども
 其天稚彦の事ハ第一一書ハ時天稚彦之妻子從天
 降來將柩上去而於天作喪屋と有て遣疾風舉尸致天と云ハ
 趣異ありと雖も天上ハ將去る事ハ同トと雖も右ニ
 九丁十小辨へたる如く古事記の旨正しく眞の古傳と見ゆ
 一丁御紀ハ如此天上少續歛の事有る趣ハ取れども
 あり然れハ右ハ謂ゆ遣疾風の説ハ僻事りと云
 小然す速飄神をして其喪屋を造り地今致たけため
 の有が爲ハ終ハ致天と云事の加りりて世ハ傳ハれ

△眞の證ハ播磨
 風土記賀古郡餘
 小印南別嬢の御
 事と竟於此宮部
 作墓於日園而葬
 之舉其尸度印
 南川之時大飄自
 川下來經其尸
 於川中云事ハ
 有ける者あり也

ろ者に見る時ハ何方をも捨ずして其正實の説を得
 べくあり有ける疾風の物を吹卷て他ハ致す事ハ右
 後欲擊熊襲就而自檀日宮引迂于松峽宮時飄風忽起御
 笠隨風故時人号其處曰御笠也と有ハ自然の事す
 如此一況て其神の回風を起して吹卷給へむわハ
 千里を致す事ハ何ハ難き事ハ有む是同ト國土
 あり所以あり ○造屋ハ第一一書ハ作喪屋殯哭之
 と見え古事記ハ於是在天天若日子之父天津國
 玉神及其妻子聞而降來哭悲乃於其處作喪屋と有て
 此國土ありての事と爲ハ甚正しく傳あり可く分所
 思えたる右の文ハ在天云々と有る對へたるハ於其
 處ハ於其國の義ありて天上より降來りて神等あり

が故小天を主として地を客と爲る文法あり天稚彦が
 下照姫と住れし上百八十小注るが如く難波の地
 と思しきを右二百五十三小考書せる狀小出雲國鳥根郡
 ハ天國玉神の神跡と思しきが上小此時の遺疾風云
 くの事成就ても意宇郡島根郡の速飄別神の社あり
 有り又筑陽坐志云日女命の神社有り久良弥神社も
 殯歛の事の由ありハ違ひ無き物なり今此を次第
 て云し小先出雲國の降著たる可し次ハ其死れり
 難波に至る可し然して飄風を以て其屍を空中小
 擧て飛彈國の致して其處小喪屋を造れりありむ

と云竊小此を思ふ事あり記傳小於其處ハ天若日
子ガ死たる所を云ふ抑此
 天若日子ハ天より降りし神ありハ屍を將て還りて
 天上より喪事を行ふ可きハ然ハ(無爲)爲ず其隨死た
 る處あり喪を行ふあり云ハ喪の言ハ記傳十三
と云れハ委しりずしりし喪の言ハ記傳十三
四十小云く喪ハ麻賀事の切れりありて死たる事のみ
六丁小云く何事小在れ凶事を云あり然れハ万葉五十三
丁小靈限剋内限者平氣久安久母阿良牟遠事母無裳
 無母阿良牟遠十五二十小伊麻太尔母毛奈久由可牟
 登又二十多婢尔互毛母奈久波夜許登伊勢物語四十
九丁小出て行く君ガ爲り脱つれハ我々へ裳無く成ぬ
 可き哉是等々母那久ハ無恙と云意あり偕死ハ有る

中の山事あり故に其時の事を凡て母と云て喪字を當たりと云れハ寔は然る言あり伊勢物語闕疑
抄に其事を注して云く出て行く人の爲に裳を脱て
遣は我とハ裳が無ありとあり母ハ裳の字あり喪
字を和邪波比と訓り衣裳の裳無くと云を以て禍無
くと云心を詠りと注せれハ古人の先見恐る可し予
又其説に依て傳十二四十注るが如く万葉又姓氏
録等に鬼字を麻と訓せたるを俗に云ふ天魔魔魔ふ
と云ふ魔ハ本より字音ありれども其字の當りて此の
も其義の言有て麻と母とハ音の相通ひて禍を成す

△上仲哀天皇
九年御紀に喪字
と御指思に訓て
母の言に約す可
ま狀に非ず結結
天皇御紀に喪字
天皇御紀に喪字
ハ誦聞とも然訓
て誦別ハ在

鬼物の稱あり事効の奇し言靈ありがクレ但麻賀
れハ母の言と成りと雖も余の叢勝けハ麻賀の
略言と見て也有ありト通證ハ喪思之略語紀中喪字
皆訓美於も比古今集云母我思尔侍亦謂喪也と注す
れたり歌の詞書ハ親の思ハ籠侍ける時云ありと有
ハ喪ハ籠を云ありと雖も万葉ニ卷城上殯宮の時
の長歌ハ嘆毛未過尔憶毛未盡者と有も其喪ハ居る
事を云れハ嘆ハ籠と云も等ト又記傳ハ云く喪屋
りけハ猶記傳の説ハ從ふ可し又記傳ハ云く喪屋
ハ屍を斂置て其事共を行ふ處あり古天皇の崩坐る
時葬奉る迄の間殯宮に申すハ坐せ奉て阿賀理一奉
一例を思ふハ上代ハ凡人のも喪屋を作りあり
因可一纂疏ハ即喪屋謂殯宮と注給へりと有り然レ
て第一一書ハ將柩上去於天作喪屋殯哭之と有るを讀

書さ北乃允恭天皇五年御紀小遣尾張連吾襲察殯
宮之消息其四十二年小或泣或歌儻遂參會於殯宮也
敏達天皇十四年御紀小天皇病弥留崩于大殿是時起
殯宮於廣瀨推古天皇三十六年御紀小天皇崩之即殯
於南庭中略是時群臣各誅於殯宮舒明天皇御紀小天皇
崩于百濟宮殯於宮北是謂百濟大殯天智天皇十年御
紀小天皇崩于近江宮殯于新宮天武天皇朱鳥元年御
紀小天皇病遂不差崩于正宮中略則起殯宮於南庭也
其他小殯宮云事紀中所小出たり万葉二七丁
小日並皇子尊殯宮之時歌小由縁母無直弓乃園尔宮

柱大布座御在香乎高知座而又廿九其時の哥小外尔
見之檀乃園毛君座者常郡御門跡侍宿為鴨又三十明
日香皇女木甕殯宮之時作歌小御食向木甕之宮乎常
宮跡定賜味澤相目辞毛絶奴又三十高市皇子尊城上
殯宮之時作歌小吾大王皇子之御門乎一云刺竹皇神
宮尔特束奉而遣便御門之人毛白妙乃麻衣著中略言左
赦久百濟之原從神葬伊座而朝毛吉木上宮乎常宮
等高之奉而神隨安定座奴又殯宮の事をハ云ずて
十三二十挽歌小大殿矣振放見者白紬布細饒奉而内日
刺宮舍人方一云雪穗麻衣服者又二十津礼毛無城上

△播磨風土記印南
浪郡大國里の下
此里有山名曰伊保
山所歌帶中日子
命乎坐於神而息
長帶日命奉石
作連來而祝禱後
石羽若石也自彼
度賜未定御靈
之時云々云事の
見たり坐於神
の仲哀天皇の崩
御せ給へると云
り其例万葉

宮尔大殿乎都可信奉而殿隱、在者と有あども同ト
事あり右の殯宮を今本の訓ハ阿賀理能宮あり其由
ハ次三百三十七丁云べ、右其万葉歌ハ殯宮の御事を神
宮と、も申せ、ハ此迄顯身して御在、坐、と今ハ
神と爲て齋奉る由あり三十一丁 子削皇子薨時歌ハ安
見知之吾王高光日之皇子之堅乃天宮尔神隨神等座
者と有、如く其御靈の天宮へ上、せ御在、坐、下神
と成、せ御在、坐、と云義を合せて其然、所以を知
べ、又常宮常都御門あ、ハ常ハ常在ハ、易、
せ御在、坐、ざ、事と賀て云称ハ在れども此ハ

△因云石引、播磨
風土記ハ寧石作連
ハ姓氏録左京神
別下天神ハ石作連
云、皇仁天皇御世
奉、爲、自、皇、皇、蘇
媛命作石棺、賦、之、仍
賜、遊、石、作、大、連、云、也
ハ有、て、石、棺、を、仕、奉
る、爲、あり、御、座、を、
云、ハ、次、ハ、謂、ゆ、殯
宮の事あり者あり

其御世を此宮ハ終、させ御在、坐、下、佗ハ迂替、せ給
ふ御事を申、して其義の取、所大小異ある者あり、同
事あり、六卷神龜元年甲子冬十月五日幸、于、紀伊國
時歌ハ安見知之和期大上之常宮等佐奉流左日鹿野
由、賀、上、尔、所、見、云、ハ、有、る、常、宮、ハ、天、皇、の
常、在、小、坐、て、御、在、坐、す、宮、所、の、謂、あり、故、其、訶、志、比、宮
段の殯宮を阿羅紀能美夜と訓、て記傳三十八丁ハ万
葉三五十丁ハ左大臣長屋王賜死之後倉橋部女王作歌
ハ大皇之命恐大荒城乃時尔波不有跡雲隱坐と有、
大荒城ハ御喪の時を云、て集中ハ多、く某、尊、殯、宮、之、時
と有、小、同、一、け、れ、ハ、あり、時、尔、波、不、有、跡、ハ、大、荒、城、仕、奉
べ、時、あり、ぬ、を、云、ハ、其、ハ、此、長、屋、王、ハ、謀、反、給、小、由

△万葉七十四如是
鳥而也古時老
三重更々大荒木野
之小竹尔不有九二
△有ハ山城國あり
あり

聞え有しハ依て窮問其罪令王自盡と續紀ハ見えて
御命の浪浪少て薨坐るハ非ぬを時ハ非ぬと云
あり若て荒城と云意ハ荒ハアラホトケアラビ鑠璞アラホトケアラビあり阿羅あり其
ハ新ハ死たも任ハて未何とハ為敢ぬ程の意少て今
世ハ阿羅アラホトケアラビ者阿羅齋阿羅火あどの如ハ城ハ墓カネの
紀ハ同ト然れハ新ハ死たも任ハて未葬の敢ざ間
且姑く收置く處を阿羅紀と云て天皇あどのハ阿羅
紀能宮と申せらあり大荒木杜と云も古の天皇の大
殯宮の趾アサ少く有けむ取と云れたハ實ハ照然る言ふ
ハ此ハ就て思ふハ古今雜中ハ大荒木の杜の下草老

△貞觀三年制定
百姓葬送之地其
一在山城國葛野郡
五條荒木西里云々
△有ハ荒木ハ
葬送之地あり事
著明一又

ぬハハ駒も賞ササめず刈人も無詠ハ新新此此ハ人の
大荒木杜ハ殯斂の事を行ひハ場あねハ人の己心避る
義を以詠詠らあり可ハ顯注密勘ハ大荒木杜ハ能因ガ
歌枕ハ山城國ハ在と云ハ古き物ハ杜をバ大荒木と
云と云ハ有ハ山城國ありハ己ハ其地名ハ残りた
ねハ別ハして杜をバ大荒木古き物と云ハ並てハ非ぬ
ゞも天皇を始奉り皇子等のをハ殯宮の趾ハ其任ハ
打荒本草の生る任ハ杜ハ成て人も刈す馬ととも飼ぬ習俗あり置れハ然然も云ハありけり
其大荒木杜ハ久世郡ハ其趾有と綴喜郡ハ荒木と
云村名有し何ハの時殯斂を行の趾あり可ハ諸國ありハ其

例あり可き事云も更あり此等の事共より説を攻行
く時ハ上百五十四丁二百九十五丁ニハ注せらる如く天稚彦が爲
ハ喪屋を造りし其所在ハ一飛飛彈國荒城郡荒城
郷荒城神社其處あり可き事其源蹴離ち遣給ひ一美濃
國喪山ハ近一と云ひ凡ての事共打合るを以て愈心
を定むるハ至れりきり然れども予が微力の能致
す所ありむや記傳十三六十ニハ喪山の事ハ就て飛彈
國ハ荒城郡荒城郷荒城神社有り上代ハ同國あり
一ハ後ハ隣國ハ成り類多在れハ是等あり心
を著べしと云置れたる其餘意を述るのこあり又記傳廿

卷ハ今伊勢の己ガ郷松坂の俗ハ人の新ハ死たる家
ハ細竹又ハ葦あとの長さ二三尺計あるを置き程
ハ束ねて堅ハ杵ハ結著て二三日程門口ハ植置て
新喪の標とす其名を阿羅加紀と云ハ是荒城の意味
あり可遺斯ハ事猶諸國の俗を尋ねハ古き
爲も名遺遣れハ事多り可見見えたり○殯之ハ
母賀理須と訓ハ第一一書ハ殯哭之と有て其喪屋ハ
て執行ハ所作を云あり今御紀ハ所見たる限を抄出
次ハ小録して然して後ハ神代の古義を知べきあり
先四神出生章第九一書ハ伊勢諾尊欲見其妹乃到殯
殿之處是時伊勢冊尊猶如生平出迎共語と有て伊勢
冊尊の崩坐ハ依て殯宮を造りて殯礼を行給ひ
由ハ書されたるハ大なる誤りて實ハ現御身の任

みて黄泉國の入りせさせ御在り坐けり由己の傳十
二ハ委ハ辨へ注したるが如し然れども其事共
ハ上古の殯斂の在り趣を以書れたる者ありければ
其證計ハ取べきあり右の殯斂之處を木本ハ曾能
衰能處と訓を以通證ハ取園陵之義以訓之と注せり
ハ謂れたり又私記ハ毛加里乃止古呂尔と訓て金
澤本此ハ同ト此を以て伊弉册尊ありぬども殯斂と
云事の此より以前ハ己ハ在り事を知べし若て古事
記須佐之男命の大穴牟遲神を試させ給ふ所ハ亦鳴鑄射入其大野
之中令採其天故入其野時即以火迴燒其野と有る所

ハ於是其妻須世理昆賣者持袈具而哭來其父大神者
思己死訖出立其野と有るを見れば喪具の制己ハ在り
事明ハらるる喪葬令義解ハ謂葬具者帷帳之属是也
と有る屍を覆ふ料と通由又其太元年遲神の御歌ハ
奴婆多麻能久路岐美祁斯遠麻都天佐尔登理與曾比
淤岐都登理牟那美流登岐波多藝母許礼婆布佐波
受幣都那美曾尔奴岐宇互と有る黒衣を惡りせ給へ
るハ此時未喪服の制有ハ非らめども記傳十一
五ハ喪葬令ハ凡天皇云ハ服錫紵義解ハ錫紵者細布
下即用淺墨染也と見え持統天皇七年御紀詔ハ令天下百

姓服黄色衣奴皂衣と見え衣服令小家人奴婢據墨衣
と定められたる此等ハ漸後の御制ありども上代よ
りも右の色ハ賤しめ惡きたる可しと云れハ然ら
説して定められたるハ非しめども神代小己ハ喪服小
被用たるを以て惡ませ給ふと見むも誣言ありざる
可し但右三百十四丁ハ注ラガ如ク上章第五一書
小披可披以為顯見蒼生奥津棄戸將卧之具と有り
奥津棄戸と云ハ天下の人民の作る屋ありて天皇の瑞
殿ハ對へたる文あるを古來棺槨の料ありと爲るガ
故ハ釋秘訓ハ己上十二字御讀不可讀之と有ハ古
くより其説を誤れるある由傳サハ卷百十丁ハ
辨へたる也若て綏靖天皇前御紀小至四十八歳神日
本磐余彦天皇崩時神渟名川耳尊孝性純深悲慕無己

特留心於喪葬之事と有ハ其式見奉り知べりすと
雖も神武天皇七十六年御紀小春三月甲午朔甲辰天
皇崩于檀原宮明年秋九月乙卯朔丙寅葬畝傍山東北
陵と見えられたるハ其三月より翌年九月ハ至る迄殯宮
小令仕坐して仕奉らせ給へるを留心於喪葬之事とハ
書されたるありけり其後の御世ハありも此ハ准
るへて知べし儲景行天皇の崩御らせ御在り坐ける
御事小就て説有り喪葬令遊部義解小遊部者終身勿
事故云遊部也と見えたるを釋小以外葬具帷帳之屬
皆是遊部隔幽顯境鎮凶癘魂之氏也終身無事故云遊

部と見えたり其隔幽顯境と云事ハ舒明天皇元年御
紀リニモトモハ幽顯を神人と訓たり其あり右三百十カ注るガ
如く死たり方を神として云事あり鎮凶癘魂と云ハ
其祭を爲して神と人との隔を能鎮るあり所以て喪
事の御事無き時ハ別ハ仕奉る可き職無ガ故ハ遊部
と云あり其事下ハ見也釋ハ古記を引て云く遊部者
在大倭國高市郡生日天皇之苗裔也所以員遊部者生
目天皇之孽圖目王娶伊賀比自支和氣之女爲妻也
有る生日天皇ハ垂仁天皇の御事あり孽ハ説文ハ庶
子也と有て謂ゆる御落胤あり此ハ其御母の寄童り

らざり故をい依て御子の數ハ列カズまへられ奉り
て御紀ハ載れざらふあり伊賀比自支和氣ハ其
出自未詳ありず比自支ハ土城ヒキあり右三百十カ注る
如く屍を收る棺ハ入城ヒトヤあり棺を置く屋ハ荒城あり
其殯斂の事終て陵と成す此土城ヒキと云あり可し然
れハ比自支と云ハ殯斂の始より陵墓ハ收る終迄の
事と取擬ふ職あり故ハ負る氏ありて有けし神
名式ハ伊賀郡比自岐神社見えたり但風土記ハ比
自岐里有神号天
王所祭三保津姫也と有れハ其祖神とも見えざる
あり伊賀考ハ在比自岐森村大森明神と有り又阿拜郡
須智荒木神社風土記ハ荒木山有神号須智明神所祭
猿田彦武内宿禰葛城襲津彦也と有れとハ荒木ハ此

を奉るハ神社の祭祀ハ御酒と御饌を奉るハ等しく
カハ祢義の捧るハ大ある少く余此のハ小ある今
考ふ可くず孝徳天皇大化二年御紀ハ喪葬の分ハ
起^越たるを戒させ給ひて奠三過飯と有を見れば上世
ハ甚々懇懇ハ奠る事あり有けり持統天皇元年
御紀天武天皇の^御殯宮の所ハ嘗て^新殯宮此日御日飯
也と有る昔飯を比自伎於保能と有る就て通證ハ據
訓則雜鹿尾菜之飯歟と注るハ然る事あり今ハ
阿哀伎於保能と訓たれば若くハ右の比自支の氏
人あり余此ハ仕奉れり昔飯ありしハ其を比

自支の御物と云て殯宮より外ハ奉るざり物あり
す但其製様の如くハ今知べり又供物を奠る
皇前御紀平群眞^鳥爲大臣の子鮪ハ罪有て誅あり奉
れ所ハ是時影媛遂行戮處見是戮已驚惶失所悲
涙盈目遂作歌曰云々拖摩該你播伊比佐倍母理拖摩
暮比你^湯追佐倍母理云々有ハ玉筥の飯と盛り
玉盤ハ水と盛り後及長谷天皇崩時而依擊比自
其ハ靈ハ水向りあり支和氣七日夜不奉御食依此阿良備多麻比岐尔時
諸國求其氏人或人曰圓目王娶比自岐和氣女爲妻是
王可問云仍召問答云然也召其妻問答云我氏死絶妾
一人耳^石即指負其事女申云女者不便負兵供奉仍以其
事移其夫圓目王^王即其夫代其妻而供奉其事依此和平

△此と御雷乃物奉
流と訓せし是あり
天武天皇朱鳥元年
御紀九月戊午朔
丙午天皇崩于正宮
と有て内中起殯宮
於南庭是日葬進
奠即誄之と有れ
ハ殯斂の事小及
ハ正奉の事小
事小又誄膳職
事云々持統天
皇元年御紀云々
此御殯の事小就
於是奉膳紀朝
臣真人等

△此と右小謂ゆ
鎮山瘡魂と云々
是

也と見えたり長谷天皇と申すハ纏向日代宮の御在
一坐一々其山脉の續けるを以然祢奉れりあり可
一即景行天皇の御事あり依擊比自岐和氣の擊字心
得ず下小我氏死絶と有れハ擊比奉るハ非ず何れハ
も誤字あり可あり七日七夜不奉御食と云ハ右小謂
ゆ祢義と余此と小仕奉る氏人無故小急わたり
推古天皇二十一年御紀皇太夫人の薨給へ所則奠靈と有て△
り依此阿良備多麻比岐ハ其殯宮ハ齋奉るせ給ふ天
皇の大御怒御在坐荒びさせ給へる由あり爾時
諸國求其比人云ハ非職の人の仕奉る時ハ幽顯境
を隔て其凶瘡魂を鎮奉る作法を知らざるを以あり

然るを其氏人の絶たるハ僅小圖目王の妻一人のこ
在けるを召させ御在坐けるハ刀を負ひ戈を持て
殯宮ハ入て供奉む事ハ似合しとぞ故小夫圖
目王ハ移して仕奉るしめたるあり即其夫代其妻而
供奉其事依此和平給也と其御魂の御荒びを和平
鎮奉れる由あり此を以て見るときハ圖目王の妻と有
かてハ在れども其祢義と余此との作法を能知り居
て傳申せり者あり可し是上古ハ其職を世しあり
て仕奉りしが故小其氏人となか
云へば女ありて事小明らきあり
爾時自今日以後キ
足毛成ハ束毛遊詔也故名遊部君但此條遊部謂野中
古市人歌垣之類是也古記云注以外葬具謂上條注云

殯歛之事是也一云葬具謂相從威儀細少之物衣垣火
爐等之類是也問遊部何人答云見釋穴云遊部並從別
式謂給不之狀スレハ遊部謂令釋云隔幽頭境鎮凶癘魂之氏
謂百姓之中有人鎮凶癘魂是人一作云公氏也事細
在古私記也又其人好鎮凶癘魂故終身無事免課役仕
意遊行故云遊部終身課役無差科故謂之終身勿事之
見ゆ尔時詔曰八成務天皇の詔勅あり手足毛成八束
毛八年の長る小隨ひて手足の毛ハ拵拵小拵む計小
生之云云古事記ハ拳鬚至干心前有同ト
由傳五百二注せらる如一遊部君ハ和名抄大

和國高市郡遊部郷見たり其郷を賜ひて君の姓ト
小成れハめり此條遊部謂野中古市人ト有ハ此小
云ハ遊部君ハ非ずして其部下の遊部を云あり
和名抄郷名ハ河内國丹比郡野中乃余古市郡古市ト
見たり是あり又飛彈國荒城郡ハ遊部郷有リ猶
然ハ地名の有ハ何れハ殯歛の事小預ル人の住け
地あり事云ハ更あり歌垣之類是也ト云ハカヒ嬬歌ハ
此部より出て仕奉りト云ふ可一然ハハ無仁天
皇三十二年御紀 皇后日葉酢媛命の薨坐一所小
於是野見宿祢進曰夫君王陵墓埋立生人是不良也中略

則遣使者喚出雲國之上師壹百人自領土部等取植以
造作人馬及種、物形獻于天皇曰自今以後以是土物
更易生人樹於陵墓爲後葉之法則中仍下令曰自今以
後陵墓必樹是土物無傷以焉天皇厚賞野見宿禰之功
亦賜鍛地即任土師職因改本姓謂土師臣是土部臣等
主天皇喪葬之緣也と有て古より比自支和氣ハ喪葬
の事と惣掌りたりけりと此ハ至りて土部臣の職
と爲りて其氏人ハ唯祢義と余此ハハ仕奉れりとハ
りけり土部臣ハ今ノ諸陵司喪儀司を相兼たるガ如
クあり可一其諸陵司正一人掌祭陵靈
喪葬山礼諸陵及陵戸名籍事と有て下ハ土部十人掌
賢相山礼と見ん又喪儀司掌山事儀式及喪葬之具事

△推古天皇十一年
御紀ハ來自皇太子
薨於筑紫云々
乃殯于周沙方沙
婆乃遣土師連
偕乎令掌殯事
又皇孫天皇三年
御紀ハ詔土師婆
婆連視皇祖喪
ふと有て是と以て
考ふ可一

と見ん九たら此等
不能相似たり△
仲哀天皇九年御紀ハ天皇崩御しせ
御在り坐け後ハ於是皇后及大臣武内宿禰匿天皇之
喪不令知天下と有て竊收天皇之屍付武内宿禰以從
海路遷穴門而殯ハカリテ于豊浦宮爲无火殯歛と有て下ハ无
火殯歛此謂衰那之阿餓利と注されたりハ殯宮ハ化
奉る所作ハ此ハ此ハの事ハ古事記ハ如此行定而日
八日夜八夜以遊也と書され天孫本紀ハ饒速日命の
薨給へると殯ハ給ふ時處ハ其神屍骸日七夜七以爲遊
樂ハと見んハてハ神樂の狀ありけりハ紀傳十三五
五ハ小喪ハ如此く樂せハ何の故がと云ハ先人の死

△上古の喪事は
奉れり神事あり
天兒屋命の廣
厚祿神所浴を
有類たり余此の
仕奉りて掌末大主
命の其祭祀を掌
か仕奉りて異
か然れ

太玉

たふハ彼天照太御神の天石屋小隱坐て世の常闇小
成なり手類たふ故小万葉三四十河内王葬豊前國
鏡山之時手持女王作歌小豊國乃鏡山之石戸立隱尔
計良思雖待不來座又石戸破手力毛欲得年弱寸女有
者爲便乃不知苦ふと詠るも此意を思へり其時の故
事を擬ひて哥樂ひて其人を復此世小還給へと招禱
意より起れり其ハ鎮魂祭儀も彼故事を擬ふ儀
有わても曉不可取と云れたるハ實小卓見ありふ
意を得て考る小寶鏡開始章天石密戸の前小火處焼
と目見え古語拾遺書され又も舉庭燎と所見たれ其殯宮の

△遊樂の事ハ常
おも御神事あり
小有る事あり人
其ハ差異と見分
べしハ非ずと雖も
庭燎ハ其ハ著明
事あり小依て
此ハ

場かてハ必庭燎を舉る習ありふと此ハ其天
皇の崩御一御事を天下小令知給へざる所あり故ハ
其御事を制止させ給へるが例とハ異なりつる由を以
て无火殯斂の号ハ起れりあてが有ぬ可き万葉二卷
薨時作歌小掉弓手取持而大夫之得物矢并挿立向高
圓山尔春野燒野火登見左右燎火并何如問者云々天
皇之神之御子之御駕之并火之光曾幾許照而有云
ハ可可の狀を思ふ小葬送の時の炬火と聞ゆ九ハ庭燎
を舉る例と仁徳天皇前御紀小菟道稚郎子の薨給ふ
所小時太鷓鴣尊聞太子薨以驚從難波馳之到菟道宮
爰太子薨之經三日時太鷓鴣尊擗叫哭不知所如乃
解髮跨以屍以三呼曰我弟皇子乃應時而活自起以居

爰大鷦鷯傳語太子曰悲兮惜兮何所以歟自逝之若死者有知先帝何謂我乎太子啓兄王曰天命也誰能留焉若有向天皇之御所具奏兄王聖之且有讓矣然聖王聞我死以急馳遠路豈得無勞乎乃進同母妹八田皇女曰雖不足納採僅充掖庭之數乃且伏棺而薨於是大鷦鷯尊素服爲之發哀哭之甚慟仍葬於菟道山上と有る此時太子の薨生れせ御在り坐り御言小若有向天皇之御所と宣給へるは上吉より身死りて其靈の行向ふ可き域有る事を知べき証文あり其事次三百三十八下云べし且伏棺而薨と有る此時己小棺の收め殯宮小安

置奉りて在りありけり其素服ハ天智天皇前御紀小皇太子素服称制と有るハ阿佐母能美曾と訓たり麻喪之御衣と云義あり同小物あり允恭天皇四十二年御紀小ハ素服を阿佐能伎奴と訓り天武天皇元年御紀小ハ喪服を阿佐能許呂母と訓りハ天皇の小限奉りて然訓奉る習俗ありあり可ハ喪葬令ハ凡爲天皇爲本服二等以上親喪服錫紵と有る義解ハ錫紵者細布即用淺墨漆也と有る類史ハ桓武天皇延暦八年十二月皇太后崩天皇服錫紵同廿五年三月辛巳天皇山崩癸亥上着服用遠江質布頭巾用皂厚繒と有る如

素服ハ細布又名質布サツラスを用ある事あり和名抄小紵
 布唐式云紵布三端今按紵者麻紵之紵俗用麻又質布
 唐韻云此音與布名也唐式云質布漢語抄云佐與美乃
 帟布質同之有是あり万葉二三十高市皇子尊城上殯宮
 之時歌小遣便御門之人毛白妙乃麻衣著埴安乃御
 門之原尔赤根刺日之盡鹿自物伊波比伏管十三二十
 挽歌小天殿矣振放見者白細布飭奉而内日刺官舍人
 方一云雪穗麻衣服者あどし見えたる即上代素服の
 制是あり古今哀傷小藤衣外る糸ハ他化人の泪の
 服玉の緒とり成けと有を頭照挽小藤衣の
 素服とり申す御門ハ是を御服の時ハ束帶して奉る

あり其とバ以月易月とて十三日御して後脱七御在
 一坐あり又裁布とて麻布をハ服ハ用あり和
 名抄葬送具ハ縗衣唐韻云縗倉回反與催同和名不知
 古路毛喪服也と見え北史倭傳ハ死者斂以棺椁妻子
 兄弟以白布制服と書ハ尔雅ハ縗之蔑者曰素と見えたる是あり
 小秋七月丙子朔己丑地震先是命葛城襲津彦之孫玉
 田宿禰主瑞齒別天皇之殯則當地震夕遣尾張宿禰吾
 襲祭殯宮之消息時諸人悉聚無闕唯玉田宿禰無之也
 吾襲奏言殯宮大夫玉田宿禰非見則亦遣吾襲於葛城
 令視玉田宿禰是日玉田宿禰方集男女而酒宴焉略天
 皇設兵將殺玉田宿禰乃密逃匿家天皇更發卒圍
 玉田家而捕之乃誅冬十有一月甲戌朔甲申葬瑞齒別

別天皇^子耳原陵と見えたり其玉田宿祢を^下て殯を
ま^らしめ殯宮大夫と任^し給へ^ら雄略天皇^{九年}御紀小
謂ゆる視喪者^{ハツリツツカガ}の類少て殯宮の事を主り葬事を行ふ
長官と所見たり其文小天皇勅大連曰大將軍紀小弓
宿祢^中略身勞萬里命墜三韓宜致哀矜^下亮視喪者又汝大
伴卿與紀卿等同國近隣之人由來尚矣於是大連奉勅
使土師連小島冢^作墓於田身輪邑而葬之也と有て此ハ
臣下の喪事あれハ大伴^{金村}室屋大連あ^らの抱^ら可
き事ありざれども其氏小人無^ら爲小勅命^ハ依て其
視喪者^ハ成^られ^しめて殯宮大夫^ハ事の狀異^らぶと

可^ら續紀^ハ知銅三慶雲四年六月文武天皇崩御^ハ
せ御在^り坐^しけ^る所^ハ以三品志紀親王正四位下犬上
王正四位上小野朝臣毛野從五位上佐伯宿祢百足黃
文連本實等供奉殯宮事^ハ有^ら右の殯宮大夫^ハを合
せて思^ふふ古^きも其長官^{カミ}次官^{スケ}判官^{ミツリ}主典^トの差別有^ら
事知べ^し其玉田宿祢^ハを以て大夫^{カミ}と爲^らる^るハ時諸
人悉聚無^ら關^ハと有^ら次官^{カミ}以下の關^ハ無^くして悉^く侍
宿^せる^るあり^し万葉二^ニ下^下從山科御陵退散之時額田王
作歌^ハ八隅知之和期大王之恐也御陵奉仕流山科乃
鏡山尔夜者毛夜之盡畫者母日之盡哭耳呼泣^ハ在^ら而

哉百磯城乃大宮人者去別南と有あてハ右の供奉のこふハ非ず其侍宿す列ハ別して凡てを云あり又二十日並知皇子尊殯

宮之時歌ハ宮柱太布座御在杵乎高知座而明言御言不御問日月之數多成塗と有も其侍宿する方あり云

あり又其舍人等歌ハ外あり見之檀乃園毛君座者常都御門等侍宿為鴨又夢尔谷不見在之物乎鬱悒宮出毛

為鹿作日之隈回乎又橘之島宮尔者不飽鴨佐大乃園邊尔侍宿為尔往あど見え其外ハも此事を詠る歌共

甚多あり但其大夫と云い視喪者と云あどハ其殯歛の事を奉り行ふ官人ありて其ハ限有る事ハを同卷近江大津宮天皇大殯ハ太右の御歌も有を以思ふハ太右及妃夫人の類ハ更あり男女の群官共

ハ仕奉る事ありハ其ハ時宜しハ依る事と思しけれハ殯宮ハ侍宿する計ハ限りて云難きを唯大夫以下の人が常ハ殯宮ハ在て仕奉る事あり又其允恭天皇四十二年御紀ハ天

皇崩御せ御在り坐けしハ於是新羅王聞天皇既崩驚愁之貢上調船八十艘及種々樂人八十是泊對馬而

大哭到筑紫亦大哭泊于難波津則皆素服之悉捧御調且張種々樂器自難波至于京或哭泣或歌儻遂參會於

殯宮也冬十一月新羅吊使等喪禮既闋而還之と有ハ新羅より來りて天皇の殯宮ハ仕奉れるハ皇國ハ已

く属國ありければ我が礼式を以て仕奉れるあり其對馬ハ筑紫より大哭泣ハ欽明天皇卅九年御

紀小天皇遂崩于内寢云、殯于河内古市云、新羅遣
吊使未叱号失消等奉哀於殯云有て此云後の御紀
共の舉哀又奉哀又發哀又哀哭と有と美祿奉流訓云即有ハ我ハ古礼云此天稚
彦の事ハ以鷓鴣為哭者云見ハ古事記ハ雉為哭女と有
事の遺制云此第一二書ハ先是味耜高彥根神昇
天吊喪大臨焉又仁德天皇前御紀菟道稚郎子の菟宛給
ふ所ハ發哀哭之甚慟と有ハ人情の忍びせ給ひ難
所云真ハ哭泣給へハ云此ハ其擬ハを為事云
由下三百五十二丁哭者の所云又張種ハ樂器云京ハ
至北事ハ繼休天皇ハ四年御紀ハ是歳モ野臣被召

到于對馬逢病而死送葬尋河而入近江其妻歌曰比羅
野駝喻輔曳輔枳能朋樓阿符美能野愷那能倭俱吾伊
輔曳府枳能朋樓と所見云右ハ同ハ或哭泣或歌儼
遂參會於殯宮と有ハ古ハ此天稚彦の事を古事記
ハ如此行定而日八日夜八夜以遊也と見え天孫本紀
ハ日七夜七以為遊樂哀泣と有ハ未外國の汝汝無
之上古の事云如此云礼式の備ハれる云本
ハり皇國ハ臣伏して正朔を奉々新羅ハ在けれハ
此の古式ハ據れハ事云更云猶此事ハ下三百六十五丁
ハ古事記の右の文ハ就て注すを見合せて曉云可云

△又推古天皇御世
大伴屋極言連公の
卒一所小天皇
勅之七日夜使留
誅於彼忠信有
誅の例ありと右の
二共一本小誅小作
りて訓を志乃漢
年と注せりも茶
由て其義同小
事下三百三十三
の所小云事共小
合せ考ふ可者多
用明天皇元年御
紀於於殯定誅
不流朝庭津如鏡
面臣等奉はる

者あり釋小右の哥を注して云く笛吹者毛野臣
久任韓國之間依漢家之例葬送送送笛歎又
本朝上古有送送笛歎又於葬禮之事と云て定め難た趣
あり又久韓地小在たれバとて皇朝の御制度を
捨て然他國の例小從ハ可一やハ記傳小引れ
た後漢書小皇國の事を彼國ハ記傳小引れ
喪十余日家人哭泣不進酒食而等類就歌舞為樂と云
らハ我ガ仲哀天皇より以上彼國の往來未無り
上古の風 敏達天皇十四年御紀天皇病弥留崩于
大殿是時起殯宮於廣瀨と有て此時初て誅を奉り
事見たり日本靈異記小子部拙輕釋略天皇御世の人が事を記せ
所小拙輕卒也天皇勅留七日七夜誅彼忠信所見た
此以前也不在事ありけり右三百二小
注せ遊釋小引る古記小凡天皇崩時者比自支和氣

等到殯所而供奉其事仍取其氏二人名稱祢義余此也
祢義者員刀持戈余此者持酒食并刀並入内供奉也唯
祢義等申辞者輸不使知人也と有る其祢義の申辞と
云る上代の誅ありつゝむを今茲小至りて漢様の
誅の風小易れ可くや續紀第四十詔小復後乃
藤原大臣不賜天在留志乃比已止乃書小勅天在久又
有を鈴屋大人の解志乃比已止乃書とハ御紀敏達
天皇御卷より末の卷誅を志乃比已止多盛麻都
流と訓是あり此字累與真平生實行為誅而定其
謚以稱之也又哀死述其行之辞也あじ注し凡る皇國

の志乃比己止も其意あり中略抑上件書紀小誄の事を
記されたる状を見れば其儀式又其詞様の事有
と思ゆ誄某事誄某事と有る其詞共如何状の詞共
かけむ其文甚床一能不能と有を思へば其詞を作
も讀も容易うござりし程知れ如何か愛なく哀
れありけむ其儀式も詞も絶て世に傳はず甚惜
し事あり誄として記されたるハ唯延暦廿五年桓武
天皇崩御の時夏四月甲午朔中略奉誄曰畏哉平安宮
御坐志天皇乃天都日嗣乃御名事遠志年志母誄白臣
未畏哉日本根子天皇乃天地乃共長又日月乃共遠

所白將去御志誄止称白久日本根子皇統弥照尊止称
白久恐年恐母誄白臣未又天長元年平城天皇崩御の時
の此二類聚國史に見え續後紀の兼和七年淳和天
皇崩御の時の一見えたるも合せて三の事あり其文
皆件の延暦の度のも全く同一事あり此等ハ彼種
の事を申し古の事ハ此上無くコソ唯形計りて
り聞えられ諸件の誄ハ天都日嗣乃御名事遠誄白
有ハ誄ハ元後後の御誄ハ就ての事ハ説文ハ誄誄也
とも注したり中略諸又孝德天皇二年御卷ハ元人死亡
之時云々或爲亡人断髮刺股而誄如此旧俗一皆悉断

と有を見れば貴人のくあらず古ハ下様きて誅せし
事と所見たリ略と云れたリ右の大化二年ハ止めり
有來りて皇國の厚き風俗共あるを思ふ此も甚く
古くより之事と見えたり下三百三十八丁ハ引で
高橋氏文ハ六寫命七十二年秋八月受病同月薨也
時天皇聞食而大悲給准親王式而賜葬也於是宣命使
遣藤河別命武男心命宣命云と有る宣命ハ右ハ異
みて事を細く載りて有り上代ハ誅と云けるハ
右等の類あり推古天皇三十五年御紀ハ三月丁未
朔癸丑天皇崩之時年七十五即殯於南庭秋九月己巳朔戊
子始起天皇哀礼是時群臣各誄於殯宮と見えたり此
ハ始起天皇哀礼ミモコト云ハ此御世迄の喪事ハハ皇國
あがりの古風あるを更ハ佛を交へて怪しき哀礼ミモコトを

定めて甚も恐き天神御子の御殯の状又ハ思えざる
事ハ改換りたるあむ此御時ハ在べく悲しき事
も云ハハ更ある御事ありける思ふ此より以前ハ
其廿九年ハ聖德太子の薨坐一時あどハ始りける其
御葬式を此ハ用初りたる者ハハ此時の大臣ハ
て仕奉れど蝦夷あどの所作ある可ハ其舒明天皇十
三年御紀ハ天皇崩于百濟宮殯于宮北是謂百濟大殯
と有て此ハ始て大殯の名出たるを思ハハ和漢枕の
式相混雜へて其哀礼の甚大ハ成れる者と所見ハ
カ何を以知らざるハ皇極天皇二年御紀ハ上宮王子

等の蘓我臣入鹿め亡され給ふ所小千時五色幡蓋種
々伎樂照灼於空臨^坐於寺々有幻の如く見えたり
物あり其心酔給へる佛法様の喪具の現れたり
を以て其御父上宮太子より皇國の哀礼の沿革有
事を知れりあり但我が古も幡を喪具に用あり事
ハ有りあり常陸風土記小黒坂命征討陸奥蝦夷事
凱旋及多歌郡角枯之山黒坂命遇病身故爰改角枯號
黒前山黒坂命之輪^{ヒトキケルマ}車^{ケルマ}祭自黒前之山到日高見之國
葬具儀赤旗青幡交雜飄賜雲飛虹張瑩野耀路時人謂
之幡皇國後世便祢信大國と見えたり黒坂命と云ハ

傳サニ三百六茨城國造條注ハ如く天津多祁許
呂命の族ありけりハ神功皇后應神天皇の御世の人
あり此を以て上古の風あり事を知へ己ハ傳九九
ハ注ハ如く四神出生章第五一書ハ伊弉冉尊の
御事を故葬於紀伊國熊野之有馬村焉故土俗祭此神
之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と有
る葬字ハ誤ありども此窟より黄泉國ハ顯身入御一所
ハ故ハ此世ハ遊坐ハ人ハ死ハ異あり
所無キ故ハ喪儀の如く鼓吹を鳴ハ幡旗を立て歌
舞の遊を爲ハ祭れりあり又山城風土記ハ謂ゆ

丹塗矢の男が化して今生給へる御子の天上の上坐て
 後の事を賀茂舊紀本朝文集等に於て時御祖神等戀慕哀思夜夢天
 神御子云各將逢吾造天羽衣天羽裳炬火擊鉞又飭走
 馬取奥山賢木立阿礼無種、綠色又造葵楓蘆嚴飭待
 之吾將來也御祖神即隨夢教令被神祭彼之有も現身ふ
 かりの事ふハ在れども其別狀ハ殯礼ハ異ありと
 を考合す可し其立阿礼と云ふ謂ゆる阿礼幡ありけ
 る此を以て上古より喪事ハ旗幡を用ふる事を知べ
 万葉ニ卷挽歌ハ青旗乃木旗能上平十三卷挽歌ハ
青青幡之忍坂山者と有るも其事を誅給へり者
 あり其制上代のハ唯の赤旗青幡ありて色を以て云ふを
 其變りれりと所思る由ハ推古天皇十一年御紀ハ是

△靈異記下卷九
 人の死けり時、事
 小備、喪、殯、物、有
 る、喪、禮、也、賀、理、
 訓、ハ、一、テ、此、ハ、同

皇太子諸子天皇以作大楯及鞞又繪于旗幟と有る
 又字を以見り小上代のハ楯ハ更あり云ず鞞ありと
 も綠色ハ事ハ非りけむを此時共ハ畫グ、せ、れ、
 あり可し姓氏録諸蕃幡文造の下ハ出自魏文帝之後
 安貴公大泊瀨幼武天皇御世率四衆飯化男龍一名辰
 貴善繪工小泊瀨稚鷗鶴天皇美其能賜姓首五世孫勒
 大壹惠尊亦工繪才天命開別天皇御世賜姓倭畫師云
 くと有を以て上代の制悉くハ漢様ハ異れり事知
 り右件三百十八ハ推古天皇より上代の殯斂の較
 略を云ふあり上古漢楚の風を雜へざる儀式共あれ
 バ其趣を得る事必此中ハ在べきあり三百十ハ
 注るが如く殯宮の訓ハ阿羅紀能宮あり又阿賀理能
 宮とも訓來る事ハ其殯斂の事を行ふ由を以ありモガリ備
 紀中ハ此殯字を賀理と訓るハ喪上の略あり若て

其阿賀理と云言ハ一傳十五二十九丁注九如く顯身
 の人の身罷る時ハ靈性ハ天上小還上事有る故ハ
 其終の事を爲す事ハ云ありけり其ハ此章ハ久之
 天津彦火瓊杵尊崩と有と始奉りて紀中何れハ
 崩字を神上理坐と訓奉る例あり是あり万葉二二十七丁
 日並知皇子尊殯宮時歌ハ其薨させ御在坐けり事
 と天皇敷座國等天原石門字閑神上上座奴と有て下
 小一云神登座尔之可波と見えし神上と神登とと
 同ト意ハ被用たり又鎮魂歌ハ御靈上り靈上り罷坐
 一神ハ今が來坐り御靈上り去坐一神ハ今が來坐る

△爲之者死人及生
 矣ハ有る意と述
 たり者あり

靈管持て去たり御靈返一成すやと有る靈上り右
 の神上り等一又高橋氏文ハ六鴈命薨坐一時ハ天皇
 聞食而大悲給准親王式而賜葬也於是宣命使遣藤河
 別命武男心命等宣命云天皇加大御言良麻宣波王子
 六猶命不思保佐外尔卒上太利聞食迷之夜晝尔悲愁給
 比川大坐須天皇乃御世乃間波平尔之相見曾奈波思
 保間尔別由介然今思食須所波十一月乃新嘗乃祭毛
 膳職乃御膳乃事毛六鴈命乃勞始成流所奈是以六鴈
 命乃御魂波膳職尔伊波比奉天春秋乃永世乃神財止
 仕奉志迷子孫波長世遠世乃膳職乃長止云々陀氏乃

人等子相交天波乱良志和加佐乃國波六鴈命尔永久子
 孫等可遠世乃國家止爲止定天授賜天此事波世
 尔過利違傍此志子知天比天吉久膳職乃内毛外毛護守
比利太家患乃事等毛无久在志給天度思食止宣大宣大宣大宣大
 天皇乃大御命良麻虚川御魂毛聞大止大宣大宣大宣大宣大
 有六鴈命乃薨給乃事乃卒上乃宣乃其祭乃神靈乃
 指虚川御魂乃聞乃え乃す乃る乃あ乃じ乃天上乃在乃着乃く乃義乃ふ
 ろを以乃あり乃此乃を以乃て乃其死者乃の爲乃ふ喪乃の事乃を爲乃る乃を
 阿賀理須乃云乃り記傳三十一九乃丁乃小阿賀理乃て乃ふ言乃の
 意乃ハ先天皇乃の崩御乃す乃と神上乃と申乃す此乃ハ底津根國乃黃

泉國乃幸乃す乃と云乃事乃を忌憚乃り乃て其反乃を以乃て天乃出乃上
 坐乃と乃ハ申乃成乃せ乃る者乃あり彼僧乃を髮長乃葦乃を余斯乃と云乃が
 如乃一乃天皇乃の乃あり乃す皇子等乃あ乃じ乃りも天所知乃あ乃じ申
 一乃事乃ハ依乃て乃ハ凡人乃の然乃る狀乃ハ云乃る事乃有乃る皆同乃ド
 斯乃れ乃ハ死乃一乃時乃の事乃と天乃出乃上乃時乃の事乃と云乃意乃ありて
 阿賀理乃云乃ハ云乃あり乃略乃と云乃れたれ乃とも然乃る反語乃を以
 て云乃習乃ハ乃す可乃き乃ハ非乃ず正乃しく其靈乃の天上乃ハ復命
 一乃に乃ハ参乃向乃ふ事乃ある由乃予乃が乃隨乃ハ定乃め乃つ乃る如乃くあ乃れ乃ハ
 右乃の如乃く正乃しく証乃有乃ハ従乃ひ乃て殯乃斂乃を阿賀理須乃云
 ハ天上乃ハ其靈乃の到乃る義乃あるを思乃ふ可乃き乃あり乃又乃其下
 又乃其下

△て川雁者雁注
せ

遠江人ハ今も人の死て第三日の事ありを三日の阿
賀理須と云ひ京ありて此を志阿宣と云う此も元へ
送上りと云意ありて同ト事あり偕如此人の死るを阿
賀流と云ふり轉りて凡ての事の成畢るを出來上る
成畢るを爲上るあり云事多し又病の新治ざら
る程を病上り雨の晴たる程を雨上りと云類多し又
下すと云ふべきを上ると云類多し事多し膳を上る
又神へ供りたる物の下しを上りと云類あり云こと
云れしハ然る事あり但其等ハ事の終て罷るを阿賀
流と云ふ離字の義あり小ハ猶考ふ可し予此辛酉年
正月西國より江戸小交ると淡路小物爲たりしが
不幸の幸ありて母の八十九ありて死るる時小遇たり
其葬事小心を就て聞く小何事を爲るをも凡て阿賀
理を爲ると云て其事畢るを打上げと云り其不幸が
幸と成て一の古
言を見出たらしき ○川鴈ハ口訣ハ川雁と作り海宮
遊行章第六一書小第往海濱低徊愁吟時有川鴈嬰
細困(尸)厄即起憐心解而放去と有を見れば尋常の鴈

を云と見えたり本草和名小鴈肪一名鶯肪鴻大鴈小
野鶯一名鴛鴦已上四名 一名陽鳥出蕪 一名傳一名送
故已上二名 苑一名 駒東人名之出 和名加利と有り偕此
小衆鳥を以て任事せるハ各其取る所有ベキ事云ル
更あれば此ハ能其遠く小致すを取れとあり古事
記遠飛鳥宮段小輕太子の挿ハ給いて其輕大郎女
の御事を阿麻陀牟加流乃袁登賣又阿麻陀牟加流袁
登賣の詠せ給ハ此鷹小寄て詠せ給ハカ
夫天登理母都加比曾多豆賀泥能岐許延年登岐波と有
ハ鶴の事あれども蘆武の故事を待して鳥を使と云

ふ諺上古小己不在一ありけり万葉九四丁小九月之
其始鴈乃使尔毛九丁二小鴈使者宿過奈利十五丁二十
小安麻等夫也可里乎都可比尔衣互之可母十七丁十九
小雁我祢波都可比尔許武等二十丁六丁小比多知敬思
由可牟加里母我と有ふとハ蘓武の故事小就て詠る
ふるが續後紀歌ハ常世乃鴈率連天と有が如く遠
く常世國より渡來る者ありけりハ此小持傾頭者小
使へるハ食物を來持て遠き小致す義を此小取れり
ありけり然ハ川字小深く目を留む可く此鴈ハず
住る常と爲るを以て川ハ云ふハ水渥ハ海邊
小多き物ふれハ濱十鳥磯十鳥と云小同トケり可

纂 築疏ハ謂鳥雁之類と注一〇爲持傾頭者ハ古事記小
給へるふとハ鹿ノ説あり
ハ河鴈爲岐佐理持と有り私記小爲持傾頭者頭人也と有
る人也ハ儂サカニラふれハ削る可一其下小紀左里毛知止須
と有る其行ある事知る又其下小死人之食持と
注せり記傳十三四丁ハ丁小私記小師説云葬送之時戴死
者食片行之人也と云り此説持傾頭者の字小拘り
て如此註せるとハ如何様少も據有つと見ゆ此説小從
ふ可一武烈天皇御紀鮪臣が戮され所へ影媛が逐
行て詠る歌ハ拖摩該你播伊比佐信母理拖摩暮比你
源逗佐信母理難岐曾良遲喻俱謀柯尋比謎阿婆例と

有る事の状載死者食行と云ふ似たり略と云れ
たり其片行と云ハ大嘗祭儀行立次第ハ左右ハ列
を雙行と云ハ獨立を單行と云ふ其單行を云ふ可
右の私記ハ死人之食持と有り載死者食と云ハ今
の大原女の此ホ薪を戴行ガ如ク飯笥を戴て持運びた
リ故ハ物を持ってハ頭の頭ぶく故ハ其義を以て持
頭頭者トハ書れたる可ク然れども岐佐理持と
云訓義の此ハ合さる可就て思ふハ岐ハ鈴屋公羽古説の如ク
笥飯の義あり佐理ハ志佐理の略也上重飯笥を頭ハ戴
く時ハ頭ハ前へ頭ぶく尻ハ後ハ引く者ありけれ

ハ後退リ爲る意を以て号けたるして訓と字と其趣
を別かりて義の合ふ所同ドクある有べりけり此
ハ異ある事あり傳三十一近改の筑摩祭ハ女の男ハ
數程鍋を頭ハ戴くと云も其竈敷を幾家したると云
事を神ハ顯ハす事あるガ其始ハ自家ハて炊きたる
飯を鍋あぐり捧けけり例と成て男を重ぬるハ従ひ
て鍋敷を増たりけり數ハ成れば頂ハ敷ぬ事あり
ガ故ハ形計リ鍋を戴く事ハ成れり古ハ飯ハ
笥ハ盛れりをも鍋ありあるをも他所ハ持運ボハ
ハ必須ハ載て戴き行く習俗ある者トゾ所見たリけ

る記傳ハ引レ北ニたる大嘗會儀及大嘗會式行立次第
小次戴御膳案女八人細布衫木綿襪と有ル此物小
限リて人ハも昇セず戴テ行ク事古キ風儀を用ヒさせ
御在リ坐ガ故ハめり又記傳ハ云ク口訣ハ助ノ尸頭也
者ト云フふどハ只字をのミ思ヒての強言ハあれハ論
論ハふハも足ス又氣去ル時頭ハ頃ハ故ハ岐佐理持ト云
ろト云フあハども更ハ小由無シと云レたハ然ル言ハふ
り但レ此義を説テ筭飯ハ皆ハ垂テ持ト云レれハ頗ハ須ハ皆ハ垂テ持ト
も云レたハ説ハ共ハ甘ハふハ難ク○及テ持テ帚者ハ此ハハ
所思ユ故ハ此ハ抄ハ出ズ川ハ鴈ノ主役ハ持テ頭者を本ト爲ス故ハ此ハ兼タる
職ハあり由り及字を以テ其境を分リたリ此下ハ
一云ハ以テ鷄ハ爲テ持テ頭者以テ川ハ鴈ハ爲テ持テ帚者ト別テ注シ又

其次ハ一云ハ乃ハ以テ川ハ鴈ハ爲テ持テ頭者亦ハ爲テ持テ帚者ト書サレ
れたハが川ハ鴈ハあリて二役を兼テ事ハ如何有ム又右
の如ク鷄ハを持テ頭者と爲ス時ハ川ハ鴈ハ持テ帚者ハ充
て然ル可シと雖モ鷄ノ用ハ外ハ在ベけれバ右等ハ
何れモ誤傳ナり古事記ハ鷄ハ爲テ掃持と有ル是
が實ハ著シく所思エたハ然ル鷄ハ歌ハも
身毛ハ蓑毛ハ云レ係テ雨露ノ毛ハ濡ズを掃フ事ハ詠
れバ其性ノ仕ハ此ハ爲テ持テ帚者トハ爲ツ者ハ有ル
可シ本草ハ和名ハ小鷺音洛故支色ハ白其音似一名ハ振鷺一
名ハ春鋤已上三名ハ一名太一之鳥出太清經和名ハ佐岐と有ル

△以鷄為持頭者ハ己ハ右云々川鷹此役有る上ハ誤あらま右注ニハ注カカクハ作ハ日神ノ石戸隱
ノ時小祈出テ奉ル狀と擬ハ車カク先庭燈と舉テ又ハ遊樂と爲サオトノ狀ハ物爲ル車アリ故ハ彼章ハ聚ハ常世之
長鳴鳥便且長鳴有カカク車とハ今成ケル也其車ノ傳リカクハ甚惜カクハ車アリケル若クハ古キ本ハ

ハ以鷄為長鳴者
ふじの言有ハ
可一〇又良海ホ
ハ此車の有上カ
次ハ以鷄を以鷄
と有ハハ其語
あり可一何カ
ても鷄の類ハ車
ハ有ハハハハ
傳ハハハハハ
有ハハハハ

△通證ハ是取
躍テ不歩カ春
也云ハハハハ
夕得テ思ハハ

を思漏されたりあり人の遊行の跡を掃く事を忌む
ハ万葉十九丁入唐使ハ錢す歌ハ梳毛見自屋中
毛波加自久左麻久良多婢由久伎美ホ伊波布等毛比
冬ハ有ハ古の人の旅立つ時ハ其居間を掃ハズ其任
ホ爲して家人の齋齋ハ事あり趣あり通證伊勢神宮

俗視客將去即帚之去後不掃除亦忌之也と有ハ如ク
我淡路の國も其風の存る所有り佗國も必有べ
キ事ありハ右の梳毛見自屋中毛波刀自ハ二共ハ
見自ト云ハ形容と鏝ハぬ事を云あり九卷ハ石河天
夫辻任上京時播磨娘子贈歌三首の中ハ君無者奈何
身持良勞良勞画ハ自畫易之ハ梳毛將反も下忌と有ハ是

○以雀為美白女ハ下ハ云として再出たり古事記ハ雀為

確女ト作レたり先此物ハ本草和名ハ雀卵一名鳶音

一名黃口一名鷓音晏已上三一名嘉賓常栖集人家如

古今矢名有丹出拾和名須々美と見え又和名抄ハ雀

漢書陳勝傳云燕雀安知鴻鵠之志哉雀音且畧反古字與爵通和名須々

米と有ハ然ハ雀鷓の下ハ須々美多加と有を思ハ

ハ須々米とも須々美とも云ハありけり儲古事記朝

倉宮段大御三皇妹歌ハ宇豆良登理比礼登理加氣豆と

有ハ契沖説ハ鷓の斑の肩あり胸あり有を領中掛た
る狀ハ詔ヘカト有ハ如ク次ハ麻那婆斯良袁由岐阿

を思漏されたりあり人の遊行の跡を掃く事を忌む
 八万葉十九丁入唐使の餞する歌小梳毛見自屋中
 毛波加自久左麻久良多婢由久伎美平伊波布等毛比
 比と有ハ古の人の旅立つ時ハ其居間を掃ハズ其任
 小爲して家人の齋齋事あり趣あり通證伊勢神宮
 俗視客將去即帚之去後不掃除亦忌之也と有ハ如く
 我淡路の國も其風は存る所有り他國も必有べ
 き事あり右の梳毛見自屋中毛波刀自二共ハ
 小其妻あぢの物爲る事あり梳毛不
 見自と云ハ形容を鏡にぬ事を云ふあり九卷ハ石河天
 夫辻任上京時播磨娘に贈歌三首の中ハ君無者奈何
 身將裝飾平画存有黄揚之小梳毛將取毛不念と有ハ是
 あり此ハ此ハ預くざる事あり事の因ハ云ふあり

△通證ハ是取
 躍而不歩如春
 也云々なふか
 と得て思ふ

ハ有ハ其語
 あり何ハ
 てハ鷄の類ハ
 一有ハやむと
 傳ハハハハハ
 有ハハハ

石子ハ作られたり先此物ハ本草ホノイハ一ハハハ
 一名黄口一名鷄音晏已上三
 名出兼名苑一名嘉賓常栖集人家如
 賓客故名之出
古今矢名育丹出拾遺和名須々美と見え又和名抄ハ雀
 漢書陳勝傳云燕雀安知鴻鵠之志哉雀音旦畧反古字
 與爵通和名須々
 米と有ハ然ラハ雀鷄の下ハ須々美多加と有を思ハ
 ハ須々米と須々美と云ハふハけハ儲古事記朝
 倉宮段大御妹歌ハ百敷の大言人ハ
 有ハ契沖説ハ鷄の斑の肩より胸まで有を領中掛た
 る状ハ詔ヘサハ有ハ如ハ次ハ麻那婆斯良袁由岐阿

閑ハ鶴鶴の尾と尾とを行合する状ハ並居るあり次
ホル波須受^米朱宇受須麻理草豆ハ庭雀の如ク曰統
居てありて曰ハ其明宮段ハ謂ゆる横白^ハ酒を醸む
器あり大神宮儀式帳ハ確^ハ白御酒備儲供奉と見え
大嘗祭式ハ曰四腰拵ハ枚と有も其料あれハ雀の尻
尾を地ハ^衝衝^ハ状ハ曰の所ハ統リ居て今日も酒宴を
爲る^ハと詠せ給へり^ハと所思^ハけれハ宇受ハ濁音ハ
れども^ハ義を取誤^ハ入てハ然^ハ書^ハる^ハも^ハ非^ハれ^ハ今^ハ
ハ清音の方ハ見^ハて去^ハ説^ハあり^ハ以^ハ雀^ハ爲^ハ春^ハ女^ハと有^ハ此^ハの^ハ状^ハ
ハ小思合す可^ハ事^ハあり^ハ記傳^ハ四十二卷^ハ四十三下^ハ小宇受
ハ須麻理草豆ハ群統居而あり宇

△此の事と私記
為春女津支女止
須有持立稻
春人^ハ有^ハ右^ハの^ハ春
女^ハ合^ハる^ハ者^ハあり

受ハ群^ハが^ハる^ハ少^ハて上^ハ卷^ハ小^ハ宇^ハ士^ハ多^ハ加^ハ礼^ハと有^ハ宇^ハ士^ハと書^ハ
ふ^ハと云^ハ北^ハた^ハれ^ハども如何^ハ有^ハむ^ハ宇^ハ士^ハハ生^ハ虫^ハの^ハ義^ハと通^ハゆ
れ^ハハ此^ハハ引^ハ難^ハハ彼^ハ和^ハ名^ハ枚^ハハ蠖^ハ蠖^ハと云^ハ虫^ハの^ハ事^ハを^ハ尔
雅^ハ云^ハ小^ハ虫^ハ乱^ハ飛^ハ也^ハ磴^ハ則^ハ天^ハ風^ハ春^ハ則^ハ天^ハ雨^ハと有^ハと雀^ハの^ハ所^ハ作
と似^ハた^ハり^ハけ^ハる^ハ春^ハ女^ハの^ハ例^ハハ持^ハ統^ハ天^ハ皇^ハ廿^ハ九^ハ年^ハ御^ハ紀^ハ上^ハ宮
者^ハふ^ハる^ハを^ハや^ハ太子^ハの^ハ薨^ハ給^ハへ^ハる^ハ所^ハハ乃^ハ耕^ハ夫^ハ止^ハ稻^ハ春^ハ女^ハ不^ハ拵^ハと云^ハ事^ハ見
え^ハたり^ハ然^ハ々^ハ時^ハハ男^ハハ外^ハハ出^ハて^ハ耕^ハハ女^ハハ内^ハハ居^ハて^ハ春
古^ハの^ハ習^ハ俗^ハハあり^ハ可^ハハ大^ハ嘗^ハ祭^ハ儀^ハハ造^ハ酒^ハ童^ハ女^ハ先
春^ハ御^ハ飯^ハ稻^ハ次^ハ酒^ハ波^ハ等^ハ共^ハ不^ハ易^ハ手^ハ且^ハ春^ハ且^ハ歌^ハ
如此^ハク^ハ女^ハあり^ハ万^ハ葉^ハ十^ハ四^ハ二十^ハハ伊^ハ祢^ハ都^ハ氣^ハ波^ハ可^ハ加^ハ流^ハ安^ハ
我^ハ手^ハ不^ハ許^ハ余^ハ比^ハ毛^ハ可^ハ等^ハ能^ハハ我^ハ久^ハ胡^ハ我^ハ等^ハ里^ハ氏^ハ奈^ハ氣^ハ可^ハ武
又^ハ三^ハ下^ハ於^ハ志^ハ氏^ハ伊^ハ奈^ハ等^ハ伊^ハ祢^ハ波^ハ都^ハ可^ハ祢^ハ杼^ハ云^ハハあ^ハじ^ハ有^ハ也

△見元靈異記
上小於二月三月之
頃年米春時其
家室於稻春時
將宛間食入於確
屋之有也女の事
少く有る播磨
風土記實成郡菰
原里條小息長帶
日賣命韓國還
上之時云春米
女等陰倍從婦料
故云陰絶田有
春米女も右小同
化て女の業少由
あり

女の稻を春く由あり又十六竹取翁哥小屋所經稻
寸丁女蚊と有る稻寸ハ稻磨あり可一神樂修浪小佐
奈見也志加之加良左幾也見之祢川久字見名子
有あど皆同ト儲持統天皇二年御紀天武天皇の殯宮
へ奉^供せ給ふ中小奉奠を久麻衰奉流と訓又口訣
小奉女為染呻戸と有る依りれけむ記傳十三
小此役ハ先和各抄祭祀具小染餅陸詞切韻云染
脂漢語抄云染之度^岐祭餅也又稗米唐韻云稗^音漢語抄
云稗米^{加之}淨米也又釋米離騷經注云釋^{和呂反和名}
精米所以享神也と有る釋字ハ釋の誤あり糶を俗小

△其染餅ハ通證
小蓋白麻也精米
云志良外洗米云
登具ハ有る如
稗米ハ水米也漬
事也俗小加須
云云是あり又

糶小作ると字書小在れば此より誤れら染米ハ今云
小白餅稗米糶米ハ今云小洗米あり然れば上代の殯
も此等の物を奠し其米を春く女あり可ト云れ
たるハ然る言あり其糶米の說ハ字書小祭神米也
と注せら久麻之云ハ糶白けて糠を能去る時ハ外
皮小隈有が如きを以て云ふめり猶糶米の說ハ傳十
四百二十の注の合せ讀べ故此の春女ハ右の如く
都伎賣あれども古事記の確女ハ記傳小字須賣と訓
て今世も米を春く者を確之者と云称有るしと云れ
たる小従ふ可一俗小白搗又白挽あど云る是あり

者ハ神象也。礼記ハ在テ先祖ノ祭祀ハ設ク者アリ
男ヲ祭ルハ男ヲ女ヲ祭ルハ女ヲ用ル。借其ハ孫爲
王父尸ト有テ孫ヲ尸ト爲ル。然レバ父ハ却リテ子
ヲ父トシテ祭ル。然レバ此尸ト云者ハ彼國ハ
モ古キ習ハハコト有ケル。甚有リト事ハ後
世ハ絶テ無キ事アリ。況テ皇國ハ然ル事有ベク
ク思ハレズ云々云レタリ。然レバ此ハ右ノ曲礼
ノ義ヲ取テ其尸ヲ神象也ト爲ル方ハ依テ其尸
ハ仕ル者ノ義。借又古事記ハ爲御食人ト有テ此尸
者ハ一兼タル役アリ。思ゆるハ右ハ引ク古記
ハ祢義余此ト有テ祢義ハ贄辞ヲ主リ。余此ハ酒食等
ヲ奉ルヲ同ト。氏人ノ仕奉ルヲ以テ万ハ略シ
タル古ノ狀ヲ思フ。御食人奉ル物甲申。在
ル可ク然無テハ右ハ引ク私記ハ死人ハ代メテ物

食ハ人ト注セリ。尸者ト云義ハ疎ク可
けれハ其奠タル供物ノ下トシテ他人ハ食セズ尸者
ノ食ハ事アリ。故ハ然ル末ノ事ヲ注セリ。ありけり
口訣ノ趣ハ死者ノ衣服ノ下トシテ取著ク趣ハ聞成
され又謁吊トハ吊人ノ云事ヲ其尸ハ向ヒテ申次ク
義ハ見レハ能通ゆるモ思合テ可クあり。又此ハ奠
ル物ノ狀ヲ思フ。右ハ以雀爲舂女ト有ク。如ク棗餅
糝米ノ類アリ。記ハ翠鳥爲御食人ト云ハ右ハ謂ゆる
余此時酒食并カ並入内供奉也ト云狀ハ有ケル
其下文ハ後及於長谷天皇崩時云々七日七夜不奉

今武烈天皇前御
紀野媛の哥の事
飯の事と稟ら
事ハ見んたう

御衣依此阿良備多麻比岐云々而供奉其事依此和平
也と有を以て此御食ハ酒食ある事を曉る可し次ハ
此下ハ謂ゆ以鳥爲実人云々其肉食を奠らして
事ハ三條小別れて各別あるを知べし推古天皇二十
年御紀皇太夫人の葬ハ奠靈を美多麻尔物奉流と訓
天武天皇(白)朱鳥元年御紀殯宮の所ハ是日肇進奠
即誅之と有て下ハ次直廣肆紀朝臣真人誅膳職事と
見え同天皇の御殯ハ持統天皇元年御紀ハ於是奉膳
紀朝臣真人等奉奠ハ畢膳部采女等發哀と有て此紀
朝臣ハ職員令内膳司の奉膳して掌惣知御膳云々事

今其次ハ嘗て
宮此日御言飯也
と有て本あり炊飯
と奉りれりあり
ハ右の例ありむ

と書され又膳部ハ掌造御食と有て此ハ大被詞ハ謂
ゆる年襪挂伴男是あり采女ハ陪膳ハ仕奉る女ありて
て即比礼挂伴男是あり此を以て尋常の御膳を奉る
れハ御事知るれなり然して其二年ハ於是奉奠奏楯
節儉ハ有をハ久麻奉流と訓るハ其春女の所ハ注る
ケ如く糴米の事あるを右の進奠をも奉奠をも御食
奉流と訓り此を以て尋常の御飯を奉る事の有を以
て古事記ハ翠鳥爲御食人と有る事の捨べりうざら
を思ふ可き者ハあむ然る時ハ私記ハ以鳩爲尸者と
良不人と有る事の據有を知小足れり云べし若
事ハ無くむハ字ハ尸者と書あがり注ハ物食

日本書紀傳三十一

〇三百五十一

小人といふ云々事ありけり記傳小御食人の
間死者小供の饗を執行小人ありと云れたる
書紀小供人者と有る是は當れり○以鷓鴣爲哭者
と云れたるハ其別無ざ小似たり
古事記ハ雉爲哭女と有て違へり偕此事ハ後ハ發
哀と云事有て其親ハ族の物爲事の類ありを思ふ
雉を以て任す方ハ勝りたるむ其ハ右二百九十九丁ハ注
るが如く此ハ九以衆鳥任事と云ハ天稚彦ハ天神の
御使として來れり雉を射たり其反矢ハ依て死れ
るあり其形を易て雉の類りけりむ此ハ依て
其視喪者ハガリツキハ衆鳥を以て任す事あり在けり其を
類て近き者を以てことハ哭者に役ひたりけり此を以て此

一事ハ古事記ハ從ふ可くぞ所思えたる其鷓鴣の事
ハ傳三十百ハ云れハ今注す限ハ非ず記傳ハ雉
任せりハ色高くて鳴鳥あるが故ありと云れたり然
れども類を以て哭むる事ハ心著れざりけり
爲哭者ハ私記ハ奈支女止須と有り下ハ死人持立時
辞止伊布と注せり死人持立と云ハ葬送の事を云ふ
リ時其ハ云辞の有る由ハ有れども口訣ハ哭者晝夜
哭と有か如く頓哭ハ哭悲として其離別の情の切
る事を其戸ハ告るがめり其ハ武烈天皇御前御紀鮒臣
が誅ハれ奉る所へ其妻の影媛が逐行て詠る歌ハ拖
摩該你播伊比佐倍母理拖摩慕比你游逗佐倍母理儺

岐曾哀遜喻俱謀と有て玉筥小飯を盛り玉盃小水を盛て持行く此ハ他人少て爲る事あるを兼て一人ハ物爲つる由あるガ此小泣濡ち行くハ人情の難忍き所より自哭つて行つてハ有れども別ハ他人を傭ひて今哭るも其意ハ同ト日者ありク一即右三百三十二下小注ヲ如く此即發哀と云事の本めて允恭天皇四十二年御紀ハ新羅人の是泊對馬而大哭到筑紫亦大哭云々至于京或哭泣或歌儻欽明天皇三十二年御紀ハ其吊便の奉哀於殯と有り孝德天皇大化五年御紀ハ阿倍大臣薨天皇幸朱雀門舉哀而慟皇祖母尊皇太

子等及諸公卿悉隨哀哭と有て恐くも臣下の薨れ方々さへハ賜りテ齋明天皇五年御紀ハ以天皇喪殯于飛鳥河原自此發哀至十九日天智天皇六年御紀ハ以皇孫大田白女王葬於陵前之墓高麗百濟新羅皆奉哀於御路天武天皇元年御紀ハ天皇の喪を筑紫小居たり蕃客ハ告させ給へるハ咸著喪服三遍舉哀向棟檜首天武天皇御紀七年ハ葬于市皇女於赤穗天皇臨之降恩以發哀九年ハ舍人王卒給へるハ天皇大驚乃遣高市皇子川島皇子因以臨殯哭之百寮者從而發哀朱鳥元年小天皇山明于此宮正戊申始發哀辛酉殯于南庭即發

哀甲子平旦諸僧尼發哀於殯庭乙丑諸僧尼亦哭於殯
庭^一卯僧尼發哀之持統天皇御紀元年小皇太子率公
卿百寮人等慟哭云々誄畢發哀次梵眾發哀云々
奉奠^一畢^一發哀樂官奏樂^一有^一始^一其^一詳^一小^一撰
奉^一迄^一數^一度^一の^一事^一あり^一凡^一事^一の^一狀^一を^一考^一み^一先^一誄^一を^一奏^一
次^一ハ^一ハ^一發^一哀^一の^一次^一ハ^一樂^一を^一奏^一大^一凡^一定^一ま^一り^一の^一如^一ハ^一此
あり^一ハ^一尸^一者^一ハ^一誄^一ハ^一似^一通^一ひ^一哭^一者^一の^一所^一爲^一ハ^一發^一哀^一ハ^一似^一
る^一を^一も^一思^一合^一せ^一て^一世^一々^一小^一沿^一革^一ハ^一有^一又^一雖^一ハ^一神^一代^一の^一古^一礼
傳^一り^一て^一亡^一び^一る^一を^一見^一る^一可^一し^一あり^一今^一ハ^一樂^一内^一あり^一送^一葬
の^一時^一ハ^一當^一り^一て^一其^一列^一の^一中^一ハ^一泣^一婆^一を^一云^一者^一を^一加^一へ^一て^一今

行^一く^一ハ^一今^一古^一の^一哭^一者^一の^一餘^一風^一あり^一者^一あり^一記^一傳^一ハ^一云^一く
聞^一紀^一熊^一野^一若^一家^一有^一死^一者^一備^一饗^一吉^一婆^一子^一令^一之^一哭^一告^一鄉^一黨^一隨^一禮^一
高^一低^一有^一哭^一泣^一輕^一重^一云^一々^一此^一事^一ハ^一予^一も^一聞^一く^一隨^一價^一高^一
低^一ハ^一一^一升^一哭^一二^一升^一哭^一あ^一ら^一ん^一定^一む^一る^一ハ^一此^一風^一俗^一を^一
聞^一て^一上^一代^一の^一事^一想^一像^一し^一れ^一た^一り^一と^一有^一る^一右^一の^一泣^一婆^一云^一々^一
物^一の^一事^一 ○ 鷄^一ハ^一本^一朝^一事^一始^一ハ^一和^一琴^一也^一麻^一上^一古^一天^一津^一神^一樂^一
奏^一令^一加^一奈^一止^一美^一乃^一命^一製^一之^一云^一々^一と^一見^一え^一た^一る^一を^一神^一祇^一木^一源
小^一ハ^一御^一琴^一神^一金^一鷄^一命^一云^一々^一即^一高^一幡^一上^一ハ^一金^一鷄^一居^一因^一以^一象^一故^一名
之^一鷄^一琴^一也^一今^一世^一号^一和^一と^一有^一を^一以^一見^一る^一ハ^一小^一登^一美^一と^一云^一々^一あり
然^一ル^一ハ^一小^一神^一武^一天^一皇^一戊^一午^一御^一紀^一ハ^一乃^一有^一金^一色^一靈^一鷄^一飛^一來^一止^一
于^一皇^一弓^一弭^一其^一鷄^一光^一暉^一煜^一狀^一如^一流^一電^一及^一皇^一軍^一之^一得^一鷄^一瑞^一也^一時
人^一仍^一号^一鷄^一邑^一今^一云^一鳥^一見^一是^一記^一也^一と^一有^一て^一此^一趣^一あり^一ハ^一本^一ハ

登毘と云けりを後小登美と云訛りハあり然れども其地を古事記小登美と云し人名を登美毘古と計も云れど何れが本未知の難し本草和名小鷄頭揚玄須音尺一名老鷄一名戴縁音又有鷓鴣相似而大揚玄指反操音彫愕二音和名止比良加之良々有る頭ハ藥小用ふを以云ふ小て實小唯の止比あり和名抄小鷄本草云鷄一名鷓鴣音狂漢語抄喜食鼠鉛和名止比而大目者也ハ有る久曾ハ賤しめて云ふ称ふ所此小鷄を役ふ右の如く小鷄ハ共小石戸開の時小功有る物あり故小其靈を招く爲ふハ有るハハハ

カケレ纂疏の御説ハ鷄鳴則風生取其靈也ハ宣ひ云鷄飛度天ハ有る然る時ハ○爲造作綿者ハ此事古事記小見えず私記小和太津久利止須ハ有る下小死人令沐浴人也ハ注ハ釋小引ハ私記小謂師説今以綿漬水沐浴於死者之人耳と見え口訣ハも造綿者浴戸以綿中と有る何れも死者をハて沐浴ニテム事と云れど其綿造りて云ふハ當る所無ハ此ハ就右の私記を引て記傳十三五十下ハ其計の綿ハ甚ハ其造る者ハ別ハ充ハべくも非ず故思ふハ戸の緩がハむ料小棺内の空處を上代ハ綿ハて埋めけむハ云れハ實ハ然ハ可く

が所思をたゞ此事と注す時十人の伯家神道書と
云と不意く持來れりを見小土瘞人葬儀死者を沐浴
せしめて披木披の棺小收る所小死者若頭則以綿固定
或結布於棺上便舉と云ひ又棺中敷白縁疊子納骸以
綿結之令不動之富當家以米固之用石灰者不可也次覆
棺之蓋以布括之如十字と有る此二條を以て其綿の
用有る事詳しと有る者あり然れば右の私記口訣等
沐浴せしむる事のみを云て其棺中尸を收めて頭
うがらし令り料小鳥鳥事迄を委曲小注さる者不
しけり○鳥神武天皇戊午年御紀小謂ゆる頭八咫鳥ハ
一も格別あり靈鳥ハ一在り九ハ尋常ありと一云

べり小非ず敏達天皇元年御紀小高麗上表疏書于鳥
羽字隨羽黒と有る此文小就て思ふ小加良須カラス黒墨
の略ありむ墨文字渡りて後の物あれども神代
小己小炭と云物有る事傳三十百下小注るが如く
又神武天皇戊午年御紀小墨坂置焮炭と云事も見え
たれが黒き物を云称ありけり此小就て物の黒きを
鳥鳥小形容して云事多し和名抄小野干と和名加良須
安布木と云事其實の黒き小取あり又擴奏と和名加
良須牟岐と有る其藁の黒きを以云り拈據と和名加
良須宇里と有る常のよりの黒色あり小依れり此を

以て其各義を註す小足九ノ万葉十四二十小可良須
 等布於保半曾杼里能麻左佐尔毛伎麻佐左奴伎美乎
 許呂久等曾奈久と有る於許呂久其鳴色を頃來コロリ
 云小取成したるが其小加良須云小近き狀あれど
 も猶黒色小成取方然と可く有る通證鳥鳥和名抄小鳥唐
 韻云鳥鳥哀都友和反孝鳥也兼名苑云鳥一名鴉音阿字
 雅云絶黒而反哺者謂之鳥鳥哺薄故反見元たり諸鳥
 を此小用ゆる夜の將小曙あむと爲る時か當り凡
 鳴く物あり在けれ其小鷄を用ゆる意味同鳥
 可く鳴く君を遣つとと詠く月落鳥啼霜満天と

今因云聖記鳥
 邪道感縁善性
 不行其大徳更
 加良須止伊布於保
 半能止利能去止
 半能求止毋止
 伊比天佐政能智伊
 奴留之有て右の
 葉哥も共小大
 云何如何あふ由ふ
 りふり

詩小作りて夜深鳥鳴く事を云り
 〇爲冥人者ハ私記小志に此止
 須と有て下小死人食物設具之人也と注し釋小冥
 人私記曰包下之類也と所見たり雄略天皇二年御紀
 小幸于吉野宮中略語大后曰今日遊獵大獲禽獸欲與群
 臣割鮮野饗上問群臣莫能有對故朕頃焉皇太后知斯
 詔情奉慰天皇曰群臣不悟陛下因遊獵場置冥人部降
 問群臣下嘿然理且難對今首未晚以我爲初膳臣長
 野能作冥膳願以此貢天皇跪礼而受曰善哉鄙人所
 云貴相知心此之謂也皇太后視天皇悦歡喜盈懷更欲
 貢人曰我之厨人菟田御戸部眞鋒田高天以此二人請

今其統ハ別ヤ
出云岐天白三二年
御紀小遣宮人臣
鷹使觀東方濱
海諸國境見
其天武天皇三二年
御紀小宮人臣大
呂云云人出た此ハ

將加百為宮人部自此以後大倭國造吾子籠宿祢貢狹
穗子鳥別為宮人部臣連伴造國造又隨續貢有之如
禽獸を料理人を宮人云云其部を宮人部と云
由あり其七年の下小或本云吉備臣弟君還自百濟獻
漢手人部衣縫部宮人部と有ハ右の國造より貢れ
中あり可一天武天皇十年御紀小宮人造老賜姓曰連
と有ハ其部を主群主あり其六十二年小宮人臣賜姓
曰朝臣と有て姓氏錄左京皇別上小宮人朝臣阿部朝臣同
祖大彥命男彥地日立大稻與命之後也と見えたり膳臣
の同流あり右の雄略天皇御紀小膳臣膳臣長野の

△伯家神道書
葬儀條小喪中
著喪服髪不塗
油不食滋味禁酒
酒不為宴樂と
有ハ古の風儀小

子孫と所見たり然れハ此の謂ゆる宮人ハ右の
例めて宮を料理して尸小奠る役小任たり者あり
けり諸通證引る魏志倭人傳ハ始死停喪十餘日當
時不食肉と云ひ又後漢書倭傳ハ其死停喪十餘日家人
泣哭不進酒肉と云ふハ右の如く其神靈へハ肉を
料理して備あり事あり在りども其家人ハ酒肉共
小食ハざして深く忌慎したりけむハ其悲哀の心
を盡すあり是ハ淳原と古人の情ありて万國ハ比
ハ無き者あり然れハ今諸國の貴賤共ハ其喪中
ハ更あり其遠閑日ハ必精進と云て酒肉を忌慎し

此事ありが此ハ佛説の爲小然爲る事誰しも思ふ
 める事ふが漢書魏志等ハ書せるハ儒も佛も渡參
 來ざりし其より以前の古俗あるを知らざる言ありけ
 り其上然々時無鳥を食ハざる事を精進と云事ハ佛
 經ゆて且て云ざりける事とが然れば我が古の事を
 竊して其出自を月氏小取係たる事多かりあり能正
 取べき者ふるがり口訣小穴人者守喪屋行之喪之
 甚拙也然後入被柩葬之注ハ
 小非ず其ハ死者を沐浴せさせてハ柩小收めて殯を
 行ふ事をハ何ぞ○以衆鳥任事ハ右件一ハ川鷹を以
 て持頭頭者あり二ハ鷺を以て持帚者と爲るあり古
事

記小三ハ雀を以て春女と爲るあり四ハ鶉を以て尸
 依る者として御食人を兼たるあり紀五ハ雉を以て哭者
 と爲るあり古事六ハ鶉を以て造綿者と爲るあり七
 ハ鳥を以て穴人と爲るあり如此くある時ハ鶉と鶉
 鶉との二ハ餘刺り物と成る内ハ鶉鶉ハ雀の種類ハ
 九ハ右小ハ雀爲春女の中ハ收つ可し鶉ハ此喪事の
 有狀ハ彼石屋戸の前の招請ハ類たりければ此ハ
 ハ長鳴せさせたる事ある可くや今も溺死の者の有
 て其屍の所在水底ハ在て知り難き時ハ鶉の艇ハ棄
 て漕巡る時ハ其屍の在る所ハ其艇至れば忽ハ鶉の

色を立ち事諸國共不知て行あつとも其由小縁此以鷄爲長鳴者此云ハ將欲事所あるふて右小衆鳥と有る太抵鳥ハと所見たるあり仕事ハ其殞事の鳥ハ任して令行る事して古事記事如此行定而事有る是あり偕此以衆鳥仕事事と云ハ纂疏事推彦有雉福故以衆鳥任葬官類之也事注され給へる事實事小説得させ給へりけり然るハ右二百九十九注るが如く天稚彦が雉を射たり其矢事己ハ天神の御所事至わりけるを天神の直事投還事下させ御在事坐けねば即其矢事害れりあり其雉の血事染たり事矢ありり事終事類事り

て後ハ雉の状事あがり形を易たりつむを此以衆鳥仕事ハ古事鳥殃事小羅り死たる者ハ衆鳥を以て葬官事任すと云法の固事あり有て行ふハ非ざら可事然爲れ事ハ本身事小復る事事もやと切事ての事事然物爲つる事あがり有べき若其形を易事ずして有る事ハ味耜高彥根神の喪を弔事ハせ給へる時事ハ其容貌の相類事給へり事て其天稚彦が父天國玉神及其妻子等の惑事ひて其我子ハ死事ずして有けり我君ハ死事ずして坐けり見混ふ如事し事ハ有事が事者あるをや事口訣事ハ天稚彦逆喪屋便衆鳥辱事也事云るハ如何事ハ此事ハ其誅事ハせ給へる天神の御事事より行事ハせ給事ハ事こ事り其尸を辱事けり

むと云事も有べかりけれ其父あり妻子あり此小集
ハれて其殯を爲さず小求めて辱けりむと云事や
ハ有べき本より天國玉神ハ天神小坐一天推彦の並
くの神小非レバ其從神も數多有へき何小事を欠
て然る鳥をしも役ふ事小有あむや事の止事無きハ
出たれバこり斯る事ハ及ひ一ありけれ然レハ事
の狀を克是明くめて説ハ立べきあり小ト部兼俱郷
説小上古野葬して鳥小食すふあり云如き悉小
當りざる安談あり者グク又通證小昔次皁比以鳥
名官其意近兵と云れたるも如何其ハ官を紀す次序
を鳥小依て立たり一者ありて人の甲しの定めあり此
ハ悉く人ハ非ずして眞の鳥を使ひ一者を争で
近一ハ ○仕事ハ許登與佐須と訓て事を寄て令行
云べき
ろを云あり此事ハ傳十四百九
十四下 小己小注せりき儲古
事記小此を如此行定而も有も其義小於て別ありず
記傳十三 一五下 小行定而ハ於許那比定米互と訓べ

書紀神代卷小彦火と出見尊取婦人爲乳母湯世及飯
爵湯坐ハ諸部備行以奉養焉と有り於許那布とハ事
を擬あひ旋と云りハ於許那布ハ言後世ハ
唯重く用へども古ハ輕くも多く用へり允恭天皇ハ
辛御紀歌ハ區茂能於虛奈比と訓り古今集序ハ
蜘蛛の布流麻比として入り土佐日記ハ米魚あと乞へ
ハ行ひつ一本云落窪物語ハ又立て此ハ雜式所ハ
ど定めて左せよ右せよあど行ひて直さず枕冊子ハ
拾子と上る事を御拾子行ふと見え源氏須磨二十ハ
近き所も御莊の司召て然る可り事共良清朝臣あど

親しき家司して仰行ふも哀ありあど有り注され
たるか如一行ふハ擬あふと云ハ近き語あり傳十九
石屋戸段ハ今合麻迦那波而ハ有ハ今合行而
云むが如ハ此も如此擬定而云たむも違へ
ハ非ハ字鏡ハ擬設也度也 ○八日八夜ハ古事記ハ
万加奈布ハ有ハ考ふ可し
日八日夜八夜ハ有ハ依て訓べハ鎮火祭詞ハ夜七夜
畫七日ハ有ハ古語の格あり記傳十三 五十八日
ハ八夜ハ對ひたれば耶比ハ訓べしが如くあれども
猶耶加ハ訓べハ倭建命段歌ハ迦賀那倍互用迹波許
ハ能用比迹波登袁加袁ハ有ハ是夜ハ對べても日ハ
伊久加ハ云證あり借此二日三日八日十日あどの加

ハ日數を云言ハて彼歌の迦賀那倍互も日ニ並而ハ
て日數を並べ計ふるを云あり加ハハ氣を通ハハ云
ハ言ハて氣ハ經ハ日數の長さを此記又万葉の哥ハ
氣長ハ云ハ又毎日を朝ル食ルハ多く詠ハ食ハ借字
少ク氣是あり借其朝ル食ルを或ハ朝ル日ルハ詠ハ
を以て氣ハ日數あり事を思定めよ若て氣ハ來經ハ
約ハたハあり來經ハ云事ハ其倭建命段歌ハ阿良多
麻能登斯賀岐布礼婆阿良多麻能都紀波岐閉由久ハ
見えたり然れば二日三日あど云ハ二來經三來經ハ
云事あり借日數を計へて幾日ハ云ハハ夜ハ舍れハ

を此の如く八日八夜あるを分て云も古語の文あり
根と云れたるを明しけし猶播磨風土記にも云支
閉丘者宗形大神云我可産之日盡故曰支閉丘と有も
傍證ハ備ふ可きあり儲殯の日数を八日八夜と云
ハ此のいひて天孫本紀の饒速日命あるハハ處其神
屍骸日七夜七以爲遊樂と見え靈異記ハ栖輕卒也天
皇勅留七日七夜誅彼忠信と有る此等ハ七日あり齋
明天皇五年御紀ハ以天皇喪殯于飛鳥川原自此發哀
至于九日と有れば其趣ハ依て定むる事ハ在り
らむを後ハ何時と無く一七日ハ定れらるる

と見え又大伴屋柳と連り卒す所ハ天皇勅留之七日便留誅於彼忠信

靈異記下巻第九條ハ人の死ハ親屬間之備喪殯物經之三日往見之禮雖有も其喪と停めたる三日の内ハ活出たりあり三日と限れらるハ有へし

右ハ引ハ如く後漢書魏志等の書共ハ停喪十餘日と云るハ我筑紫辺の風俗を僅ハ聞知て云ありめども其を以て万ハ大ハあり古を察ハ可き者ハ但自然の如く古より七日七夜ハ定まる事其來り所ハ有て己ハ傳九卷六十四下廿九卷十下廿ハ注るガ如くあり然れば此の八日八夜齋明天皇の九日ありハ例ハ異ハ○啼哭を私記ハ於良布と訓ハ金澤本も然ありと雖も其ハ上ある哭聲を己ハ於良布と訓て謂ゆる叫ぶ義あり由己三百ハ注せらる如く然らハ此ハ其殯礼を行ふ所ハ然叫ぶハ非ハ可ハ此ハ右三百五ハ注せらる如く殯歛の所ハ至りて發哀と云事の有ハ同ト狀あり所ありければ祢那久と訓べきあり即第一書ハ此事を作喪屋殯哭之

と有と同一所あり心あり已の上章あり時聞川上有
 啼哭之聲と有あり祢那久と訓其傳廿三二十の
 注々續紀第五十一詔小狀朕大臣誰母加我語比佐氣
 年孰就母加我問比佐氣年悔弥惜弥痛弥酸弥大御泣哭
 之坐止詔第五十八詔小朕波汝乃志字暫久間毛忘得
 末之自悲備給賜比之乃比賜比大御泣哭川大坐麻万
 美奈毛須
 葉二二十從山科御陵退散之時歌小夜者毛夜之盡書
 者母日之盡哭耳呼泣乍在而夜右八續言て啼哭を云あり九三十見菟原處女墓
 歌小新裳裳之如毛哭ホナキ泣鶴鴨と有も墓を見て新喪の如
 く啼哭くもあり此外小例數多有れども今ハ喪事

小拘りたり限を一二引るあり儲右の以衆鳥仕事ハ
 葬官あり此小啼哭くハ此次小謂ゆる親族属妻子の
 爲り事あり然るを纂疏小啼哭悲(音)歌衆鳥之色也
注させ給へるハ其意を得させ給ハ
 あり鳥小ハ各任有ハ其役小所有り然るを鳥小の
 啼哭せ置て其主も歎く可き妻子の側より見て有む
 事ハ思も寄らずあり ○悲歌を加那志美志乃夫と訓の私記小
 ハ此二字を志乃布と見え金澤本ハ加那志年との
 訓れども猶官本小從ひて加那志美志奴夫の訓フの可きあり四神出生章第十
 一書小伊弉册尊と別れさせ御在し坐て出返らせ給
 ふ所小伊弉諾尊曰始爲族悲及思哀者シズケルハ是吾之怯也
 見えたり悲と一ありて其離別の御事を歎らせ給へ

△右小引に續紀實
五十八詔小悲備
賜此之乃此賜也
大御泣哭川太坐
頻々有る此の
續き小同トト物
く其之乃此唯
當ふ其義のさあ
を此小云當ふ
就て其慕ふ所
作者と云て別あり

らハ此小謂ゆる悲あり事傳十一五十小注るが如く
 儲歌字小思哀の義ハ非れども此を古事記ハ以遊
 也と有る其ハ記傳十三五十小遊ハ管絃歌舞の類
 を云也樂字小當りけりと注されて御紀小謂ゆる歌舞
 を奏する是あり此時ハ常りて歌舞を爲す事ハ其死
 者として此小還るゝめむと爲るめて彼石戸段ハ更
 あり鎮魂祭も其歌舞を爲すも同一意ありければ
 此ハ其歌舞を爲す事と志奴夫ハ云あり右三百
 三小注るが如く上古の殯礼の狀ハ其初先誄を爲て
 其人を悲し慕ふ由の詞を述べ次ハ啼哭く聲を

△靈異記誄被
忠臣又誄於彼
有ハ誄の事あり
一本ハ誄小作り
て志の邊心年と
訓ハ又哭誄作歌
日ハ誄と志乃地
と訓ハ又此ハ歌
字を訓むと同一
意味あり者をや

大小發けて倍其情の切れり由を知りめ終ハ歌舞
 を爲て其靈を娛樂させ返り活きむと爲る所作あ
 りありけり然れハ此小て歌字を志奴夫と訓せたる
 事ハ其義を令知るめて習有る訓と云者あり由右
 三百三小注る事共小合せ考へて曉る可く記傳ハ書
 紀ハ唯八日八夜悲歌とのも云て樂の事を記され
 ざるハ御國の古礼を忘れて一向ハ漢様ハ書成され
 たる者あり悲歌とのもめてハ古意ハ背ける者をや
 と云れハ實ハ然ら言あり然りも雖も此歌字ハ似
 て一も著ぬ志奴夫の訓有ハ其慕ふ爲ハ樂とハ云ぞ

れども他小事有る由を知らせたり者と見ても有ら
むや 鈴屋大人の然たられたるハ通證ハ悲歌者猶後
世挽歌之類也と注されしと あじ小就ての説と見
の成る程其歌舞の事の止て僅小挽歌のを歌いし
時の狀小當たるハ注の誤あるやして御紀ハ志奴夫
と云義小用しれ 偕上 三百三十一丁 小舉たり如く允恭天皇
四十二年御紀ハ天皇の殯歛の御事小就て歌儻を仕
奉りし由見え天武天皇朱鳥元年御紀ハ其殯宮の
御事小就て次國ニ造等隨参赴各誅之仍奏種々歌舞
と有ハ謂ゆる風俗儻の舞を奏せりして韓唐の樂を奏せ
りありざる證是あり是亦礼式を未西蕃小借用させ
給ハざりし證も充べし其殯宮より猶有り持統天

皇御紀元年ハ納言阿部朝臣御主人誅之 中樂官奏樂
二年ハ於是奉奠奏楯節儻と見えたり其を私記ハ
楯節舞即吉志舞也と注されて皇國ハ出来れりの樂あり右等我
上古より殯礼ハ歌舞を爲し例の僅小見えたりふ
ろハ右 三百三十六丁 小引る四神出生章第三二書ハ伊弉册
尊の石隱給ひし跡小就て故土俗祭此神之魂者花時
亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣と有ハ世人の死
るとハ異りて顯御身あがり入らせ御在し坐ハ在
れども其境を別小爲させ給ふ於て相等しきが故
小御靈を招奉るハ石屋戸の式を用ひて歌舞を爲て

後小祭事と成ぬ者あり又山城風土記小見え
たる丹塗矢の男小化て今生給へり天神御子の天
上小升坐後小御祖神等恋慕哀忠思夜夢天神御子云
各將逢吾造天羽衣天羽裳炬火擊鉞又鎗走馬取奥山
賢木立阿礼垂種々絳色又造葵楓蔓巖饒待之吾將來
也御祖神即隨夢教令彼神祭と賀茂日記本朝文集等
小出たり此小歌舞と云ざれとも擊鉞と云ハ即小
其事の有ふあり東遊曲の求子歌小十者也布留賀
茂能也之呂乃云々有ハ後の歌あれとも己小其事
の有ふと知小足れり此小顯身あがり升給ひハ

在れども生別も終小遇給小事の無むむハ死別も
然しも異うざり故小歌舞を爲て招りせ給へりして
別ある意味の有ハ非あり故天孫本紀あり饒速
日命の薨給へり殯小ハ日七夜七スカミ以爲遊樂と有て其
をハ神事ハ訓む事して神事ハ喪礼と其式の二有ハ
ハ非ずして其行ふ所の情態ハ歡喜ふも悲泣しむと
の差有のこし知る可ハ記傳ハ云く天武天皇十二年
鼓吹葬之續紀ハ長屋王吉備内親王の屍を葬りて發
る時の詔小吉備内親王者無罪宜准例送葬唯停鼓吹
と有ハ此等を見れば親王公卿あどの時も然る事有
りありけり但喪葬令ハ太政大臣より三位迄の葬具
の式を載たり中親王一品鼓一百面大角五十口小
角一百口云く三位鼓四十面大角二十口小角四十口

云々、と有る大角小角とあり尋常の樂小ハ非ず其
故ハ大角小角ハ御國にても尋常小用あり器あり尋
常の管の類小ハ非れハあり然れど葬小然々物を用
ふるも本ハ上代の遊樂の形の遺れらる可し又此
鼓吹小就て上代の遊樂と有をも其類ふるむと疑
ふ人も有あり然れど上代のハ角の如き管ハ非
ず唯尋常の樂あり一事古書小見えたる共あり知べ
し天武天皇持統天皇御卷小見えたるも然れハ其
頃と雖も天皇の御時のハ猶上代 偕又記傳ハ云く喪
の如くあり有けむと云れたり 小如此く樂せしハ何の故りと云小先人の死たるハ
彼天照太御神の天石屋小隱坐て世の常問小成れり
一類たる故小万葉三四下河内王葬豐前國鏡山之
時手持女王作歌小豊國之乃鏡山之石戸立隱尔計良
思雖持待不來座又石戸破午カモ欲得午弱寸女有者爲

使乃不知苦あど詠るも此意を思へり其時の故事を
擬ひて哥樂びて其人を後此世小還給へし招禱々意
より起れり其ハ鎮魂祭儀カも彼故事を擬ぶ儀有カ
ても知べしと云れしハ上三百二十六丁小注るが如く實小
古今の卓見ありと云るハ所思えたり其似たる事ハ
て有り一小人の死るを石隱と云ハ彼石戸隱小取
わらあり二小哭悲しむ事の有ハ彼群神然迷半足固
措拾遺古語小當れり三小持頭頭者以下の葬官を定む彼
諸部神カして招禱の事を任せり小等し四小以鷄云
くハ彼聚常世之長鳴鳥使互長鳴と有小似たる由右

大正
府庫

大正
府庫

三百四十五丁 小注々が如し五小此の尸者ハ古小祢

義と云者小て納言の役あり後小誅と云事の有る縁

あり是天兒屋命の大諄辞して祈申させ給へるが如

一六 小余此と云者有て其殯宮小入て物を捧くる職

有即大玉命の大御幣を取捧げさせ給へる小趣相

似たり此事右 三百二十二丁 小注ウ七小仲良天皇九

年御紀小為元火殯斂と有ハ常小殯宮小ハ庭燎を置

一誣して和名抄葬送具小謂ゆる門燎是あり即彼所

の火處焼と云る者ありハ右 三百二十七丁 見る可しハ小

ハ古祢義ハ太刀戈を奉り余此ハ刀を奉る事見えたり

